超走エアスケボー！　ソニックハウリング

櫂若俊和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超走エアスケボー！　ソニックハウリング

【Ｎコード】

Ｎ０５３４Ｚ

【作者名】

櫂若俊和

【あらすじ】

ジェットバーニアで浮遊するスケボー、エアスケボーが微妙に流行るこの世の中。

嵐山高校エアボー部、チーム・バンガードストリームの、風神レク・下垣内サキ・倍場コウヘイ・獅子瓦ジン・旋皮ヒロナが様々なライバルとエアスケボーレースを繰り広げる！

EP．01

BREAK　IN

ブロロロロ！

スケボーらしきものが、空中を駆けていた。

その空中の周辺にはパイロンが並び、エアレースのコースを象っていた。

パイロンに沿って進行する空飛ぶスケボーとその乗り手。

風を受けて疾駆し、なだらかな高速コーナーへと差し掛かる！

機体のリアにはバーニアが付いており、そのバーニアが上下左右、フレキシブルに動き、スピードを極力殺さずにコーナリング！　続いてワインディングをクリアする！

【エアスケボー】。通称【エアボー】と呼ばれる飛行型スケボーとその乗り手、エアボーダーが片手に固定しているリモコンを駆使してジェットバーニア、スラスター、ウイングなどを素早く微調整し、走行機は美麗な流線型を描く！

「エアボーレースッー！　宙を舞い、駆ける新感覚モータースポーツ！　溢れる躍動感！　風を受けて感じるスピード感！　爽快感！　これは凄いッ！」

その若い女の実況解説声と共に、プロボーダーのエアボーレース中継番組が嵐山高校の各教室のテレビから勝手に放映される。

唐突な事のためか、男女問わずテレビに釘付けになる昼食中の生徒達……。

一方、職員室。

この放送テロに気付いた教師達はまず、弁当を吹く。

そして散った食べ物を回収ながら、「勝手な事を！」と激昂し、歴史教員の飯田を中核に放送室へ修羅の顔で急行！

同時刻の放送室内。
そこにはマイクを握り締め、熱烈にエアボーレースの魅力を語る美女、額のゴーグルが特徴の【風神麗駆（カザカミレク）】の姿があった。
そう、この女、放送ジャックの犯人である。
アグレッシブな動きの彼女に対応すべく、彼女の髪はポニーテールに結ってある。
その馬の尻尾は元々、爆発しているように後上に跳ね上がっているのだが、舞うように彼女の熱弁と同時に揺れ動く。
彼女のマシンガントークは加速していき、まだまだ治まる予兆もない。
「こ～んな面白いレースが学校で出来るって知ってたぁ！？　そう、その名も『エアボー部』！」
彼女の真横の椅子に座り、放送機器を調整している少女は【旋皮（センカ）博菜（ワヒロナ）】。
サッパリとしたショートヘアに、沢山の絆創膏を手に貼っているのが特徴だ。
「ハァ、声がデカ過ぎるなぁ……ボリュームを下げるかぁ……」
レクの加速する熱弁と共に音量も上昇していくのを察知。
脳裏で呟き、ボリュームを弄り、下げるヒロナ。
実に淡々と行うのであった。
レクの豪快な営業トークはまだまだ続く。止む気配が無い。
「しかも、今なら部費はタダ！　全部学校が負担するの！　わ～お、ビックリ！　更に何と！エアボードを私物にしてもＯＫ！　これで通学や移動が楽になっちゃう！　何て豪華なのでしょう！！」

そこにドン！と、粗野な音と共にドアを開く教師達。
教師が来た！！
その事に気付くレクの隣後ろで腕を組み、背を預けていた男、【倍場航平（イバコウヘイ）】。チャラけたタレ目に、ロン毛を後ろに束ねた洒落た感じのイケメンだ。制服も第1、第2ボタンを空け、着崩している。

彼は悩ましげに額を抑え、息を吐き捨てる。
「あ～あ、やっぱりバレたかぁ」
レクは眉毛を歪め、舌打ちをする。
教師は寂しい髪量の額を高騰させ、ズカズカとレク達に迫る。
「お～ま～えら！　だ～れが勝手に放送室を使っていいと言った！
しかも、テレビジャックまでもするとはなぁ！」
対し、レクは眉間に山を設け、逆ギレする。
「はぁん！？　ウチら、学校に金払って来てんだから、施設をどう使おうが勝手じゃな～い？！」
我に非非ず。いけいけしゃあしゃあと言い放つレク。
「ハン！　全くだ。こっちは学校に金を納めている言わば『お客様』なのにな……これが普通の店や企業ならとっくに潰れてるな。やれやれ、テメェらにはサービス精神が決定的に欠如しているぜ……」
コウヘイが皮肉めいた嗤いを混ぜて、レクに続く。
「それに、飯田先生、あんたの授業って、ただ教科書読んでるだけじゃん！　他の教師は板書位するのにこれで金貰えるってズルくない？　ってか、ホント授業料返して欲しいんだけどぉ！！」
レクがガン飛ばし、「金を乗っけろ」と言わんばかりの平手を突き出す。
そして挑発的にクイクイッと指を動かす。
何と不遜な！　怒り、震える飯田達教師陣……。額に血管が浮かび上がる。
「またお前はそういう事を……いいか、お前等はここで教育を……」
「んじゃ、サイナラー！」
聞く耳持たず。さらりと受け流し、レクはしれっとドアへ足を運ぶ。
「待てこら！」
教師・飯田が白昼堂々逃げる標的を捕らえるべく手を伸ばす！
だが、これを想定出来ないレクではなかった。いや、むしろこれを待っていたのだ！

迫って来る中年男性教諭、飯田の手。
その先へ完全フィットするかのように。それでいて、ワザとやったように見えさせない身体の流れの範囲で行われた巧妙なテクニックであった！
そう！　レクの胸を飯田の手があたかも掴んだような画が完成したのだ！
ふわりとたわわに実ったレクのおっぱいが感度の良い音を立て揉まれる。
次にその瞬間にシャッター音が鳴る！
コウヘイの携帯電話がこの乳掴みを『写真データ』として保存したのだ！
「あー！！　先生が女子生徒のおっぱいを触ったー！！」
槍の如く突き出す人差し指！
ヒロナがはきはきと過剰なほど大きな声で現状説明する。
実に芝居じみて、それでいて国語の朗読なら最高得点を得られるような位、はきはきと滑舌良い発音であった。
写真を取った名カメラマン、コウヘイもその勢いに次ぐべく、携帯電話を印籠の如く翳す！　そして、コウヘイは蛇の如く、素早く舌を舐めずり回す。
「証拠は取った！　言い逃れは出来ませんなぁ～」
追い詰められていく飯田教師は後退し、焦燥に奔る。
「グ、グゥ……またハメやがったなぁ～」
「ヒ、ヒド～イ、うら若き乙女の大事なところを触っておいてぇ…」
急に弱い子ぶりっ子するレク。
外見と今までのキャラ造形を考えると、実に不釣合いで、実に不気味だ。
「でもぉ～、これって事故かもしれないから、部費援助金アップで許してあげようかなぁ～」
血の気が引き、うろたえる飯田教諭。
棒読みでぼやくレクは抜けぬけと退出。

彼女に次ぐコウヘイとヒロナ。
コウヘイは教師にとって印籠のような存在、携帯電話をブラつかせながら、去る。
飯田は頬を震わせ、額から汗を流す。
「ば～ああ～い！」
平手の指を波のように泳がせ、ヒロナも小馬鹿にした笑みで退出する。

ガラガラッ。ドアが若き手によって閉る。
膝を突き、頭を落す教師、飯田であった。
「はぁ…また奴等に弱みを握られた……」
はらり。
頭を落とした衝撃で只でさえ残り少ない毛の一部が散っていく。
しまった。またもや奴等に弱みを握られた。
そう、飯田教諭は溢す。
撃沈……南無。
げに恐ろしきかな。この落胆の様から、恐らくとんでもない量か質の、若しくはその両方の要素を持つ弱みを握られているのだろう……。
飯田の左右にいる他の教師陣もレク達に畏怖の念を抱くのであった。

第1走

1

放課後。
オレンジ色の空をバックに、帰宅者や部活活動者がそれぞれの目的を遂行する。
ありふれており、退屈な場面であろう。
しかし、平穏で和やかな雰囲気だ。
だが、それが突如ある3人によって脆くも崩れ去る。

サッカー部員達はこの時間、通常なら特訓に励んでいる時間だが、その3人＝レク、コウヘイ、ヒロナに言い寄られ、困惑していた。
「ねぇ！　あんた達のだれか一人でもいいから、エアボー部に転入してみない？」
「いや、そんな事言われても…」
「サッカー好きでサッカー部入ってるからさぁ……」
レクはジトッを下位からチンピラ風味に凝視する。
「あんたら、プロサッカー選手になりたいの？　ワールドカップで好成績残してくれんの？　ってか、なれんの？　出来んの？　えぇ！？」
「は？」
「何だいきなり……？」
「もしなったとしても、外国と比べボロボロ弱小のサッカーなんてやるだけ惨めなだけじゃなーい？　そんなモン、辞めた方が良いって！」

「いや、確かに今の日本のサッカーは弱いけど……」
下へ5度ほど俯くサッカー部員。
「だったら、サッカーなんてくだらないモン、辞めてエアスケボー部に来ない？」
「ぬぅ…」
「これ、面白いし、日本のプロボーダーも優勝争いに食い込んでるじゃん？　死んだ分
野よりも、可能性のある新しいフィールドに行くべきよ！　これホント、お勧め！」
プツリと何かが切れる。サッカー部部長を中心にわなわな身体が震える……。
誰にでもあるだろう。
己の好きなものを否定された時のこの上ない屈辱感。
ある意味自分自身を否定されるよりも腹立たしいものだ。
「他人に自分の価値観を押し付けるなーーーっ！！」
怒号放出！
声を張り上げ、激昂するサッカー部部長。
「ハン、こう言われちゃぁな。流石に価値観否定は拙い……退いた方がイイな」
駄目だこりゃと、眉を歪に曲げ、コウヘイは両平手を左右に持ち上げる。
コウヘイの言葉に御意し、酸っぱい顔をするヒロナ。
「まぁねぇ～」
不機嫌なまま2人に続くレク、激昂の意を示す顔芸を披露する。
「けっ、サッカーなんて日本人がやっても恥さらしにしかならないっつーの！　バッカ
じゃねーの！」
そう吐き捨て、消え去るレク達の後姿であった……。
エアボー部・部室。

所々に錆のある椅子に座り、途方に暮れるレク、コウヘイ、ヒロナがあった。
３人は同時に溜息を吐き落とす。
「ハハ……ヘッドハンティング、今日も全滅だったねぇ～」
ヒロナは苦笑いしながらぼやく。
「それに、昼休憩にあんなに大々的に宣伝しても一人も来ないとはね……異なる価値観
の人間が多いとは実に嘆かわしいものね……」
脱力し、天井を見上げるコウヘイ。
天井。小汚いが、何だかんだで何年も保っている天井。
レクは組んだ足の内、地に浮いている方の脚をぶらぶらさせ、頬杖を付く。
「あと一人、あと一人なのよねぇ～」
「エアボー高校選手権は４人のレーサーと１人のメカニックマンが揃わないと出場も試合も出来ない……ホント、あと一人のレーサー枠が埋まればねぇ～」
行き詰った現状。肩を落とすヒロナ。
そこへカツッと足音が突如響く。
ある男が入室した。それは剽悍な大男、【獅子瓦迅（シシガワラジン）】。ジンが愛機の黒
いエアボーを持って入室。
クールでエッジの利いた表情で他人を寄せ付けないような正統派イケメンだ。
彼はレーサーユニフォームを着用しており、所々地面や擦った汚れが存在する。
しかし、このユニフォームの生地が頑丈なのか、擦り傷にまでには至らない。
「ん、まだ見つからないか……」
ジンは一直線にしている口を開く。
「ええ。大々的に宣伝したにも関わらずね」

そう連絡し、ペットボトルのスポーツドリンクを飲むレク。
実に豪快だ！　その証拠に短い時間で飲料が減っていく。
「で、どうなんだよジン、そっちの方は」
コウヘイがジンに気さくに問う。
「3回に1回の成功……といった具合だ。まだまだ練習しなくてはならん。『あの走法』は確実に俺個人には愚か、チームの武器になる……妥協する訳にはいかん」
「そっかぁ～」
「すまんな、部員勧誘に協力出来んで……」
涼しげで憂いのある顔を表すジン。
「いいのよ！　最後の一人はどうせウチらより素人になるだろうし、試合に出られても勝たなきゃ不愉快で無意味だもん。獅子瓦君にはその点を確実に補ってもらいたいの」
「それに、あんた、勧誘出来るようなタイプじゃないでしょ？」
ヒロナがジンに皮肉気味に訊ねる。
「……そうだな」
ジンは足を運び、自分の黒いエアボーをフックに掛ける。
その黒いエアボーへ工具ボックスを持ってひょいと接近するヒロナ。
「で、修理するトコある？」
「多分ない。バッテリーの充電で十分だ。だが、念の為、一通りチェックはしておいてくれ」
「オッケー！」
ヒロナはプラスドライバーをボックスから取り出し、ガンマンさながらにカラカラッをドライバーを手元で回し、掴み直す。
そしてドライバーを黒いエアボーのネジにはめ込み、回す。

ヒロナは明朗な口調を停止し、黙々と分解していく……。
一方、レクは沈黙の下、悶々と思案中……。
さて、どうしたものか。
素人でもいいとはいったものの、その素人すら捕まえられない現状。
素人といっても『素人にしてはエアボーの巧い人間』が必要であり、全然見込み・武器
になりそうにない輩は不要。
自分やコウヘイ、ジンがフォローするつもりだが、流石にてんで使えない輩を入れると
フォローしきれないだろう。そこまでの妥協は許されない。
結局の所、素人にしては使える存在探しが難航しているのだ。

……翌日。
曇りの天気の中、体育の授業が行われていた。
2年4組女子の体育は野球場にて、ソフトボールをしている。
レクとヒロナはキャッチボール練習をしている。
ふわりと飛び交うソフトボール。
まったりのろのろと、御世辞にも熱気の無いキャッチボールであった。
「ねぇ、ヒ～ロナァ」
さぞ面倒そうにソフトボールを投球するレク。
ゆったり飛ぶソフトボールをキャッチし、投球し返すヒロナ。
こちらも同じような飛び方であった。
「んん？」
キャッチ。そして再度、ややスローリィに大きく振りかぶり、投球するレク。
「今日、どの部を刈ろっか？」
淡々とボールをキャッチするヒロナ。
「刈るって……」

ヒロナはキャッチボール同様、ゆったりとした苦笑いをしながら、ボールを投げ返す。
「う～ん、もう残す運動部も少ないからねぇ～。女子、男子両方のテニスとバドミントンの４つぐらいだったかな？　じゃあ、まずテニス部でも狙う？」
ボールをミットに収め、もう片方の手でボールを掴むレク。
「まぁ順番なんてどうでも良いんだけど、取り敢えずテニス部狙うか！」
先程より、若干勢いのある投球を見舞うレク！
そのボールは少々慌しくヒロナのミットにダイブする。
「そ！　で、女子と男子どっちから？」
突如、コミカルに奇怪な踊りを踊り出すレク。
「はいー女子、男子、女子、男子ィ～！」
ヒロナは投球すべく振りかぶるが、ピタッと動作を止める。
「はいはい、言うと思った……で、どっちにする訳？　エアボー部部長さん？」
「ま、男子でしょ。どっちかっつーと頑丈で体力あるヤツ、欲しいんだし」
喋りながら飛んで来るソフトボールをガシッとレクは捕獲する。
「普通に戦略的に考えたらね……」

日の光の落ち着く時間。放課後……響くチャイムの音。
コート整備を始めるテニス部達。男女問わずテキパキと作業が進む。
が、ズン！と踏み入れる三人により、整備は呆気なく中断される。
「げ！」
「来たよ！」
と、声は出さぬもの、どう見てもそういった類の表情のテニス部男子の集団であった。
「エアボー部、入らなーい？」

うげ！　来やがったヨ。どうする？
密集し、互いにごそごそと会議を始めるテニス部男子達。
よっこらしょ。コウヘイはフェンスに背を預け、欠伸をする。
「は～あ、これはまた収穫ゼロかな？」
若干、狼狽の色を見せつつ、こそこそ話し合うテニス部男子勢。
「どうする？」
「断るんだよ。普通に」
「けど、あの真ん中の爆発ポニーテールの女、教師を脅して部費を調達するようなヤツだぜ？　逆らわない方が良いんじゃねぇの？」
「いやでも、脅すのは教師だけで、生徒相手にはしてないって聞くけど……」
「確かに。その証拠に未だに部員集まってなくて勧誘してるもんなぁ。とっくに誰か脅して無理矢理部員ぐらい揃えられるのに、現実、していない……」
「じゃあ、堂々と断るか……一応、訊くけど、お前等全員エアボー部に入る気は無いんだよな？」
部長は部員達を見回す。各々の気持ちを確かめるべく。
首を縦に振る者は1人としていなかった。よかった……。
ぐるりとターンし、毅然とした表情になるテニス部男子全員。
「悪いけど……」
「チッ！」
不必要と思ったのか、バッサリとレクは彼らの最後の言葉を聞く前に舌打ちをする。
しかし！　丁度その時である。
ある悲鳴が聞こえたのだ！
この場に相応しくない甲高い女子の声の悲鳴であった。
「い～やぁあああああっ～～～！！！」
！？　思わず、声の発信源を見やるレク、コウヘイ、ヒロナ。

対象を視界が捉える。
追い駆ける小汚い野良犬。
その野良犬に追い駆けられているのは1人の女子生徒であった。
しかし、この程度の事ではさほど驚くことではない。
だが、それは『驚くようなこと』であったのだ。
ツインテールの少女の逃げザマ、フットワークはとても決め細やかで、スピーディであった。それはダンスにしては荒々しく、ランニングにしては粗雑なものだ。
彼女はヒステリーに叫びながら、コートのネットを飛び越え、逃走！
しかし、負けじと？　野良犬はひょいとネットを飛び越え、彼女を追う。
「もう、やだぁ〜！　来ないでよぉ〜！！」
涙目で少女は再度ネットを飛び越える。
しかし、野良犬はまたもやネットを飛び越える。
その一連の動作が繰り返される。
ジグザグジグザグ……実に絶妙なフットワークである。
傍から見ればナイスフットワークである。
故、皮肉屋な人間たちから「スゲェな」と圧巻させられる。
当然、ニヒルなナイスガイ、倍場コウヘイ氏はノリの良い口笛を気障ったらしく吹く。
「ハハハ！　何とも見事な身のこなしだ」
だが、レクだけは衝撃に表情を凍らせていた！
「す、素晴らしいわ……」
隣にいるヒロナはその言葉の意味を問う。
「え……？」
「最後の一人……決まった！」
「マジ！？」
「いくよっ！　ヒロナ、倍場君！　あの子を助けて恩を売るのよ！！」

走り出すレクを1，2秒遅れで追うヒロナ、コウヘイ。3人はV字陣形で疾駆する！
ヒロナは走りながら、頬を引き攣らせる。
「この場においても打算が入るかこの女は……」
「フ、まぁ、巧く恩を買ってくれればいいけどな……」
人を食ったような男、コウヘイは鼻息をスーッと漏らす。
ツインテールの少女はネットを飛び越え、地面を蹴ろうとするが、滑って転倒してしまう！　スカートからパンツが間抜けに露出する。
「サキ！」
テニス部女子の仲間達が危惧し、彼女の名を叫ぶ！
シャッ！　そこへ3つの影が燦然と現る！
ドスン！　引き締まった健康美脚が野良犬の前に立ちはだかる。
「おい！　そこの汚い野良犬！……」
警戒し、喉を唸らす野良犬。
左右に2つの影がそうしている間に降り立つ。
指をゴキゴキ鳴らすヒロナと高く、紳士然とした鼻を上へ突き出し、汚物を見るような
目で見下すコウヘイによるものであった。
絶叫マシンのように急激に頭を落とし、チンピラよろしく、メンチ切るレク。
「消えな！　野良は大人しく他の犬のフンでも食ってろ！！」
レクは自慢の美客で野良犬を宙へ蹴り飛ばす。
空間に弧を描かされる野良犬。
言葉は理解出来ない。
だが、野良犬は察知した。
こいつらは恐ろしい。歯向かわない方が良いぞ。
と、瞬時に感じ、キャンキャン吼えて立ち去る野良犬であった。
まさに文字通り、負け犬の遠吠えである。
そんな様子を侮蔑的に眺めるコウヘイ。

「雑魚犬か……」

尻餅をついて、野良犬の失踪に安堵するツインテールの少女、【下垣内沙希（シモゴウチサキ）】。

彼女の目線には、彼女に取っての英雄の姿があった。

その英雄の一人であり、代表のレクという名の女が、彼女に平手を差し伸べる。

「大丈夫？」

レクは不自然なようでそうでないような輝かしい笑顔でそう訊ねる。

サキは無意識的に・反射的に表情が晴れ、その掌に自身の手を乗せた。

「あ、ありがとうございます…え～っと……」

「レク！　あたしは風神レク！　２年４組みよ！」

「あ、上級生なんだ……あたしは１年２組の下垣内サキと言います」

「ねぇ？　野良犬が逃げて嬉しい？」

レクは不自然に顔を近づける。

思わずサキは顎を引き、レクの顔と遠過ぎないように距離を取る。

「はい！　嬉しいです！　あたし、昔っから犬が恐くって……」

「その野良犬を追っ払ったウチらに感謝してる？」

「はい！　してます！」

屈託の無い笑顔で答えるサキ。

「恩返ししたい位に？」

「はい！　出来れば！」

またもや穢れ無き笑み。所謂純真というものだろう。

「じゃあ、エアボー部に入らない！？」

「はい、入ります……って、えぇー！！？」

目を大きく見開くサキ。

やられた！　ハメられたっ！

見事なまでの誘導。

サキはまさかこう来るとは予想だにしていなかった。
衝撃・動揺が静まらない。
「ヒロナ！」
「はいはい！」
レクの指示を受け、ヒロナは手馴れた様子で何処からともなくカルテにボールペンと共に装備された入部届けを取り出し、レクに渡す。
レクはボールペンを紙面に奔らせる。
「え～っと、1年2組、下垣内サキっと…」
こいつ、マイペースだな……汗ジトのヒロナ。
「いや、勝手に書くなよ……」
あれよあれよと勝手にエアボー部員にされる事にサキはあたふたするしかない。
「え…え～っと……その…」
「ねぇ、サキってどう書く訳？」
カルテに綴じられた入部届けをサキ渡す。
サキはもはや乗せられている事を忘れているのか、只々自分の名前を漢字で記入すのであった。
　その遠方にいる他、女子テニス部員はサキを助けに行くべきか否か揉めていた。
「どうする？　助ける？」
「でも、あの連中、怖いから関わりたくないなぁ～」
「だよねぇ～」
「悪いけど…犠牲になって貰おっか……」
「だね」
　問題解決！　サキは生贄になった。
　無常にも他の女子テニス部員達は足音を立てずに徐々にその場を離脱するのであった。
　ふと、思い起こすヒロナ。
「あ、でもレク、ハンコはどうすんの？　要るでしょこれ？」

顔を酸っぱくするレク。
「あっちゃー、忘れてた……仕方ない！　サキちゃん、あんたのキスマークでいいよね？」
「へ？」
きょとんとしたリアクションを起こしたゼロコンマ秒単位の間に、レクにより入部届けを唇に押しあてられるサキなのであった。
さらりと入部届けを引き戻す。
「うぅ、痛い……」
赤く腫れた顔面に涙目のサキ。
入部届けにはリップクリームのクリーム色が淡いグレーの入部届けに付着していた。
「わお、セクシー！」
「セクシーなのか？…」
馬鹿馬鹿しくもぼそっと突っ込むヒロナ。
そこへクスクス嗤いながら、コウヘイが来る。
「おいおい、最後の1人は男にするんじゃなかったのかぁ？」
「予定ではね。でも、さっき見たでしょ？　この子のフットワークは絶対エアボーの武器になる！　武器になるモンがあれば女でもいいんじゃないの？ウチみたいに！」
　コウヘイはひょいと両腕を後頭部に持っていく。
「フ、まぁそれもそうだぁ」
「さぁて！……」
　サキの細く、白くて透き通った腕をレクの手がショベルの如く捕える！
「レッツ、エアボー！！」
「え？　えぇ～つ！！！？」
　サキを引きずり、猛ダッシュするレク！

「あわわわわ」サキは揺らされ、目が回る。

2

エアボー部・部室。
隅っこ体育座りで、涙の雫を猛落下中のサキ。
「何で…エアボー部に……勝手にエアスケボー部に…」
ヒロナは苦笑いしつつ、頬を指でポリポリ掻く。
「やっぱ、拙かったんじゃないの？　泣いてるじゃない」
「連れてきたのは風神、お前だぁ！　責任はお前が取れよ！」
足を組んで椅子に座るコウヘイは不遜に指差し、そう責任転嫁する。
「あ～もう、ウッサイよ！　でも、むざむざ逃がす訳にはいかないからなぁ……」
レクは部室の3，2インチのデジタルテレビを点ける。
「？　何で部室にテレビがあるんだろ？」
と、テレビを発見したサキは疑問を呟く。確かに不自然だ。
「教師から貰った！」
レクがさぞ当たり前のようにのたまう。
驚き、表情を寒くするサキであった。
「え……何でそんな事が」
「ま、脅したんだけどね…」
何処にでも居そうなオバサンよろしく平手を仰ぎ、苦笑い交じりでヒロナは補足説明する。
テレビを買わせるとか。何て人達だ。サァッと青褪めるサキ。
ここに居るのは。いや、この連中に関わるのは危険だ。
しかし、逃げたらもっと危険だ。
そう肌で感じたのであった。
ならば取るべき態度は決まっている。
（とにかく、好意的な態度を取っておこう……）
それが無難だ。下手に拒否しては倍以上の地獄が待ってそうだから。

レクはブルーレイデッキを立ち上げ、エアボープロモーションムービーディスクをセット。デッキはディスクを読み取るべく、稼動する。
暫くしてディスクが再生される。
昨日の昼休憩に放送した、プロエアボーレースが液晶画面に鮮明に映る。
「ま、まずはこれを見てみ！　面白いよぉ～」
「と、取り敢えず見なきゃ……」
と、サキはたどたどしく視点をテレビに合わせる。
テレビに釘付けになるサキ。
今迄家族も含め特に興味が無かった為、見る事は無かったのだが……。
……確かに！　凄い！　エキサイティングだ！
しかし、自分がやりたいとは思わなかった。だって壊そうだもん。
でも、褒めなきゃ。何とかして無理矢理にでも誉めなきゃ。
そう判断し、あたふた賞賛の言葉を捻出するサキ。
「す、すすす凄いですねぇ～！　ホント、感動しましたぁ！」
サキは小学生の作文並の稚拙な表現を使い、必死で興味あるフリをする。
「人間業とは思えない位に…ハハハッ……」
「！！　サキちゃん……」
ピクリと鳥肌を立て反応するレク。
サキは苦い顔をし、唾を喉に送る。
拙い！　流石にわざとらし過ぎただろうか……？
そして思わず恐怖に目を閉じる。
ガシッ！　サキの手はレクの両手に捕えられる。
しかし、今度の捕獲は以前のより何所か温かみを感じた。
顔をゆっくり恐る恐る上げ、瞳を開くサキ。
目の前に瞳を輝かせ、嬉々と感動しているレクがあった。
「サキちゃ～ん、分かってくれたのねぇ～！　良かった、良かった

ぁ！」
感涙。豪快に抱きつくレク。
反対に冷めた様子で頬を引き攣らせるサキ。
「い、良いのかなこれで……」
部室遠方にて、白けた表情で静観しているコウヘイとヒロナ。
嗤い吹くコウヘイ。
「プ、あれ、どう見ても演技だろ……」
「言わない言わない」
ヒロナは活気ない笑顔で突っ込み平手をコウヘイの肩にこつんとあてる。

燦然と並列する４つのエアスケボー。
「う、うわぁ～スゴーイ！」
サキは必死で感動し、しゃがみ、赤、青、黒、そして白い色のエアボーを見つめる。
「この赤いのがあたしのマシン、クイーンサイクロンよ！　カッコイイっしょ！　これは高速型にチューニングしたマシンなの！」
赤いボディに、紫の吹き荒れる疾風の模様が特徴の機体、それがクイーンサイクロンだ。所有者の自己主張の激しさが機体にも影響している事は一目瞭然である。
鼻と豊満な乳をツンと突き出し、気丈に説明するレク。
「高速型？」
何の事やら。サキは訊ねる。
「コースに合わせたマシンセッティングする必要があるのよ」
続いてヒロナが詳細説明をする。
「そう。高速コースを走るならスタビライザーを減らして軽量化したり、バーニアの最大出力を強化したりするんだよぉ。逆にテクニカル型はスタビライザーを増やし、スピードを抑える代わりに高い安定性を得る。バーニアも出力よりも上下左右の稼働力を重視したセッティングにするの！」

「へ、へェ～」
意味はよく分らないが、何やらスゴイ事らしい。
今のサキにはそう把握するだけで一杯だった。
コウヘイは壁に背中を預け、サラサラの己の髪を分ける。
「で、青いのは俺のマシン、ブルースバイパー！　テクニカルコースの覇王さ！　デザイン、ネーミングからして素晴らしいだろ？」
軽快さを感じさせる青いボディに画から出てきそうなオレンジ色に彩られた獰猛な大蛇の模様の入った、総じてクールな印象を持つマシン、ブルースバイパー！
「こ、これってカッコイイんだ……」
エアスケボーにおける美的感覚を認識不可能なサキは本人の主張に流される。

そして黒いボディのエアボーに目線が向うサキ。
「それは俺のマシン、シャドウスナイパーだ……触るなよ」
冷然と圧するように告げるジンが入室。
脊髄反射で萎縮するサキ。
「は、はい……触りません……」
力強い印象の黒いボディに、薄青でライフル銃の絵がマーキングされたマシン、シャドウスナイパー！　全体から威圧感を放っている機体だ。
ジンはシャドウスナイパーの元へ向い、充電完了している事を確認し、持ち去る。
「怖そうな人だなぁ……」
サキ、去って行くジンを見ながら感想を脳裏に呟く。

「……で、最後の1つは？」
「あんたのよ！」
「これが…あたしの……」
「色はまだ塗ってないから、好きなカラーリングや模様にして良い

のよ！」
「へぇ～」
凄い。これが自分のマシンなんだ。
サキは瞳を輝かせ、自分のまだ名もカラーリングも決まっていないマシンを見つめる、
「しかし、よくもこんな高価なもの、学校が買ってくれましたねぇ～」
サキはぼんやりと、疑問を飛ばす。
「もしかして……」
返答は予想がついた。だが、一応本人から聞いておきたかった。
改めてどんな人間かを確認する為に。
「あ！　それはね、教師共をセクハラとか言って脅して出させたの！　教師の給料や学校の金なんて元を辿ればあたしらが払った学費なんだから、幾らでもブン取っていいっしょ！　いや、寧ろトコトン金を絞り取るべきよ！　これは自分の払った金を返す行為！　正当な行為よ！！」
しれっと罪悪感ゼロで言い放つレク。
「やっぱり」と言葉を濁すサキ。
この女、やはり恐ろしきかな。そう悪寒を走らせるサキであった。
「まぁ、まず乗ってみない？　とにかく慣れなきゃ！」
意気揚々とウインクするレク。
「う、うん……」
（ホントは慣れたくないんだけどなぁ……）
心中で。いや、心中でしかそう言えないサキであった。

3

所謂ブランクバージョンのエアボーが体育館裏に配置される。
その隣にジャンパー、スパッツ、スカートの女子用レーサーユニ

フォームを纏ったレクが愛機、クイーンサイクロンに足を乗せ、コードで本体に繋がれたリモコンを専用固定グローブで握っている。
「いい？　まずはウチが手本、見せるからね！」
その隣、サキはブランクカラーのエアスケボーに片足を預けている。
「う、うん」
レクは額のゴーグルを目元にスライドし、ズッシリとボードに両足を踏み込む。
「まずは両足をボード面にしっかり入れる！」
「は、はいっ」
「次にリモコンを操作するよっ！　黄色のボタンを押す！」
ジャキン！
クイーンサイクロンの左右からウイングが出現する。
サキは思わず目を大きくする。
「！！　ウイングが！」
「ウイングを出したよ。これで飛行準備はＯＫ。そして……地面を蹴り、ダーッシュ！」
通常のスケボーよりしく、地面を蹴り、走らせる。回るタイヤ。徐々に加速。
遠くなっていくレクを目で追うサキ。
「赤いボタンでバーニア・オーン！！」
言葉通りに赤いボタンを押すレク。
クイーンサイクロンの後部に搭載されているバーニアが噴出！！！
「そしてほぼ同時に緑のボタンでスラスターオン！　バーニアとの順番はどっちでもいいんだけどね！！」
機体の真下にある推進装置が発動！
加速・バーニア噴出と同時にボードが上昇していく！
「凄い！　本当に浮いた！！」
興味無くてもそそるものがあったのか、ポカンと口を開け、瞳を大きく見開くサキ。

轟音を立て、空中を突き進んでいくレク&クイーンサイクロンであった。
サキは自由自在に空中を疾駆するレクの姿を茫然と眼で追っていた。
「本当に空中を走ってる……」
「当然でしょ？　エアボーだもん」
胸を張ってヒロナが告げる。
「更に！　緑ボタンの下にあるダイアルを回せば推進力調整！　アップするよぉ！！」
レク、手慣れた手つきでダイアルを回す。
スラスターの噴出出力が少し激しくなる！
先ほどまで、水平にしか走らないクイーンサイクロンが上昇！
「上昇した！」
「スラスターの出力を上げたんだ。スラスターの出力を調整する事で高さを調整出来るんだぜ」
コウヘイがさぞ当たり前のように説明する。
「へぇ……」
風を切り裂き、体育館裏を走り抜けるレク。彼女は赤いボタン、アクセルボタンの下に位置するアクセルダイヤルを少し下げる。
すると、バーニアの勢いが少し萎む。
そして、両足を使ってボードを左右に揺らしていき、ターンする！
「はい！　ターン終了！　戻るよぉっ！」
再度アクセルダイヤルを高くするレク。
バーニアの勢いが復活どころか、1，5倍の出力を出す！
そのまま一直線！！
風を引き連れ、サキ達の元へ帰還する。
説明しながらの余裕綽々としたデモであった。
アクセルボタンを切り、勢いが衰えてきた頃合いにスラスター出力を緩め、クイーンサイクロンは空中に位置するだけになる。
スラスタースイッチを切り、クイーンサイクロンはゆっくり降下する。

レクはゴーグルを額へ戻す。
「どう？」
サキは圧倒され、萎縮する。
「す、凄いと思いますけど……こんな事あたしには……」
こ、これで断れるかな？
と、小さな希望を賭け、余所余所しいマナジリで呟くサキであった。
「大丈夫、センスを見込んで誘ったんだから！　先輩のセンスを信じな！」
「は、はぁ……」
哀れ。
虚しく希望は散華したのであった。
「んじゃ次、やってみ？」
サキは「私が？」と、自分に指を差す。
「他に誰が居る訳？」
何をいわんや。平然とレク、コウヘイ、ヒロナは平坦にサキに視線を向ける。
「で、ですよねぇ…」
サキはピクピクと引き攣った笑顔になる。
「大丈夫、ウチが一緒に走るから！」
「は、はぁ……」
またもや、ずるずると流されていくサキであった。

スタッ。自分のエアボーに両足を乗せるレクとサキ。
「じゃ、いくよっ！　両足、ちゃんと乗せたね？」
「は、はい」
「ではまず、地面を蹴る！　地上を走るよぉ」
「はいっ」
地面とボードの間で回転し、軋むタイヤ。
レク、サキは空気抵抗を受け、乗り進む。
「緑のボタン、スラスターオン！」

緑のスラスターボタンを押す事を促すレク。
エアボードだけに限らず、ボードに乗る事に大事なのはバランス感覚。
まずはそちらをしっかり養って欲しいが為にこちらを優先したレクなりの配慮である。
指示を受け、あたふたしながら、動作を追うサキ。
推進装置から空気が噴出し、両者のエアボードが浮上していく。
しかし、サキは突然の浮遊にバランスを崩し……地面に落ちてしまう。
頭と脹脛を一番下に、スカートから捲れたパンツの山頂を見事気付く。
「痛ったぁ～」
何てこっちゃと、ヒロナは頭を抱える。
「あっちゃぁ～、ここから躓いたかぁ～」
「ハハッ、前途多難だな」
眼を閉じ、涼しげにのたまうコウヘイ。
コウヘイは目の前にパンツの山頂があるにも関わらず、平然としている。
興味がないのだろうか。それとも見ないフリをしているのか。
何れにせよ、この男、読めない男である。
転倒したサキを引っ張り、ひょいと起き上がらせるレク。
「ちょっとぉ～大丈夫？　しっかりバランス取らなきゃ～」
「こんなの、無理ですよぉ～」
サキ、悄然と呟く。
「無理なヤツなら、誘ってないから！　野良犬から逃げてた時の運動神経を発揮すればいいのよ！」
そんな無茶な。「そうは言っても……」と言葉を濁すサキ。
「ま、兎に角、乗る！　根を上げるなら、何百回もやってからにしな！　元、テニス部員でしょ？　運動部ならちったぁ、根性見せないとね！」

「う～ん、そう言われると……分かりました！　やってみます！」
よし！　レクは柔和な笑みを見せ、掴んだサキの手を放す。
そして、愛機クイーンサイクロンの元へ向う。
レクの口車に乗せられたのか、それとも運動部の人間として火が着いたのか、レクを追うように自身のまだ名も無き、愛機へ歩むサキ！
「よし！　行くよっ！　両足踏みしめ……スラスターオン！」
「……スラスターオン！」
浮上する2台のエアボー。
「…バランス、バランスを取らなきゃ……」
目じりを険しくし、己に暗示をかけるサキ。
おっとっとと、ベタに呟きながらも今回は落ちずに浮上したままの位置をキープする。
思わず、感嘆を挙げるヒロナはガッツポーズで意を示す。
「やるじゃん」
しかし、コウヘイは不敵で涼しい顔だ。
「……いや、どうだろうな？」
拳を握り、レクは心から感動する。
「やるじゃない！　そうそう！　その感覚よ！」
誉められて嫌な気分になる場合は基本的に少ない。
サキは思わず、表情が快晴化していく。
「は、はいっ！」
「じゃ、このまま、進むよっ！」
レクは赤いアクセルボタンを押す。
クイーンサイクロンはバーニアからエネルギーガスを噴出！
進行！　徐々にスピードアップしていく。
同様に進行するサキのエアボー。
しかし、これまた進行の勢いに乗れなかったのか、忘れていたのか、サキとその愛機は正反対に吹っ飛ぶ！
……以降、レクに叱咤激励、レクチャーされながらも、サキの七

転び八起きが続く。
続いてはスラスター調整。
サキはスラスターダイアルを回し過ぎて上空へ吹っ飛ぶ！
アクセルダイヤルの調整。
怖くて少ししかダイアルを弄らない。いや、弄れないサキ。
それでは意味が無い。と、レクに叱責される。

……そして、何時の間にやら日の暮れ、紺色が空を支配してきた時刻となった。
ベタに烏の鳴き声が聞こえる。
呆れた様子のヒロナに、呑気に欠伸をしているコウヘイ。
「なんか、一歩進んで一歩転ぶって感じね」
「フハハ、亀の歩みだな……」
サキは生気を失った表情で、尻餅をつく。
「もう、無理ですよぉ～」
計算不足。流石にここまでとは。頭が痛いレク、ヒロナ。
対称的に鼻で笑うコウヘイ。
「ま、素人なんだ。こんなもんだろ？」
頭を掻き、難しい表情を浮かべるレク。
「……サキちゃん、今日はもうオシマイ、帰っていいわよ！」
サキは内心、堪えつつも喜びの顔がどうしても出てしまう。
「あ……はい、じゃぁ、さようなら……」
逃げるように去るサキであった。

4

完全に黒紺色に支配された空。まごう事無き夜空である。
「はぁ、もう今日は散々だったぁ～」
溜息を落とし、バス停へとぼとぼ歩むサキ。疲労困憊を隠せない表情だった。

「それもこれも元々は野良犬に追いかけれらた所為で……」
噂をすれば何とやら。
何処からともなく犬の鳴き声が！
ゾクリ、悪寒を走らせながらギコチない反応をするサキ。
やっぱり！　以前現れた野良犬が追いかけて来るではないか！！
「い～やぁあ～！！！」
サキ、奇声を発し、涙目で尽かさず逃げる！

同時刻、エアボー部・部室。
工具ボックスの蓋を締めるヒロナ。彼女は薄汚れた軍手で額の汗を拭う。
「よし！　改造完了っ！」
「ありがとうヒロナ」
「当然でしょ。だってあたし、メカニック担当じゃん」
さらりと会話を交わし、サキのエアボーを見やるレクとヒロナ。
「スペーサーチップを1つ追加したわ。これであの子も安心して使える筈」
「不備が無いか、一応テスト走行しよっか？」
「そうね。一応した方がいいかも」
「あの子が使うモンだからね……しっかり、チェックしておかないと…」
「あれぇ？　随分あの子に入れ込んでるじゃなーい？」
覗きこむような目でヒロナはサキに視線を送る。
名も無きサキのエアボーを担ぐレクは外へ向おうとするが、一旦ピタリと足を止める。
「……勝てるからよ」
「？」
「あの子が加われば、ウチらが高校ナンバー1のエアボーチームになるからよ！　それ以外に理由が要る？」
胸を突き出し、自信満々に言ってのけるレクであった。

「……そう」
ヒロナはそれ以上、言葉は発しなかった。
試合したいよね。
勝ちたいよね。
それが夢なんだから。
嫌いじゃないよ。真っ直ぐなアンタ。
だからかな。あたしがあんたに付き合ってやってるのは。
まぁ、あたしも元々エアボー、好きだけど……。

一方で、奇声・悲鳴を上げながら必死に逃げるサキ。
ジグザグテクニカル走法を無意識的に行い、逃げ惑う彼女であった。
負けじと4足を駆使し、サキを執拗なまでに追う野良犬。
「もう〜、来ないでよぉ〜！！」
サキは天へ叫ぶ。しかし、神など居る訳もなく……。

同時刻、校外道路にてサキのエアボーのテスト走行の最中であるレク。
「！！」
発見！　レクは眼を見開く。
何とサキがまたもや野良犬に追い駆けられているではないか。
ニヤリと、レクは何やら狡い事を閃く。
「……これはチャンスかもしれないわね！　サキちゃん！」
次に何とレクはリモコン付グローブを外し、現在走行中のエアボーから飛び降りる！！
「犬が嫌なら、エアボーで逃げ切りなー！！」
レクのハキハキとした大声を聞き入れ、レクの存在に気付くサキ。
「あ！　レクさん……って、え〜っーー！！？」
そんな無茶な。
まだあたし、乗りこなしてませんよ？

そんな状態で出来る訳無いじゃないですか。
理不尽だと吐露するサキ。
だがしかし！　迷っている間に野良犬がヨダレを垂らし、接近して来る。
……嫌。
嫌、来ないで！
でも、来ないでという言葉が通じない相手なのは重々承知。
ならば、逃げるのが妥当。
そして今、野良犬から確実に逃げる方法が１つ転がり込んで来た。
風を掻き分け接近して来る自分のエアスケボー。
ゴクリ。
息を呑み、飛び乗るサキ……見事、ボードに両足を着地させる。
だが、リモコンは下へ吊るされており、これでは操作が出来ない……。
しかも、そのリモコンを野良犬が狙っている！
「あ～！　いやぁ～！！」
炸裂！　野良犬をレクが蹴り飛ばす！
そして、ぶら下がっているリモコンを蹴り上げる。
上昇したリモコンをキャッチし、サキはグローブごと装着する。
「やったっ……」
サキが表情が緩んだのは束の間だった。
レクは再度、野良犬を蹴り飛ばす。犬はヨダレを吐き、地面に叩き飛ばされる。
「リモコン、喰おうとすんな！　捕まえんな！　でも、追え！　追い付かないように追え！」
野良犬に無茶振りをするレクであった。
もはや動物虐待の域である。警察がこの場に居ないのが救いだ。
「か、風神先輩……」
野良犬はレクから逃げるようにサキを追撃する。
「って、ぼーっとしている場合じゃなかった！　逃げなきゃ！！」

リモコンをグッと握り締め、素早く操作を開始！
彼女は消して冷静ではなった。
だが、野生的な・反射的な判断力はあった。
アクセルダイヤルを急激に上げる！
轟音と共に加速！
しかし、サキは吹っ飛ばされず、加速に喰らいつく。
《野良犬から逃げたい！》
その一心がエアボーにしがみ付く執着心と感覚を齎したのだ。
だが、負けじと野良犬は４足をフル活用し、猛追！
「まだ追い駆けて来る……こんな時、どうすれば…そうだ！　あれだ！　推進力を上げるんだ！！」
スラスター調整ダイアルを回す！
筋肉をしならせ、コンクリートを蹴り飛ばす４足。野良犬がボードへ飛び掛る！
その時！
その時だ！
噴出するスラスター！
上昇するエアボーが野良犬のジャンプを無碍にする。
哀れ。野良犬はコンクリートにダイブするのであった。
しかし、野良犬は再起し、サキを追う！
（しつこいっ！）
サキは下唇を噛み、か細い眉毛をＶ字に釣り上げる。更に彼女の手がリモコンを裁く。
グインと、真横へバーニアが可変！
そしてエネルギーガスを轟音と共に噴出！！！
エアスケボーは真横へ移動！
野良犬は地面に頭から突っ込む！
そしてそして！
高噴出するスラスターにバーニア！
どんどん地面から離れていく……サキは飛翔し、見えなくなる。

サキは野良犬を振り切った！！
やった！　それは開放的な笑顔だった。

紺色を失い、黒ずんだ完全夜空。
……公園ベンチにて、息を切らし、横になっているサキ。
荒い呼吸をしつつも、サキに晴れやかな顔があった。
そこへ１つのエアボーの影が降り立つ。
レクがクイーンサイクロンに乗って到着したのだ。
「！！」
「どうやら、逃げ切ったようね。やったじゃん？」
「レクさん……は、はい！」
「ねぇ？　今日、ウチに留まってかない？」
ボカンと口を開けるサキ。
空けたままだと蚊が入ってくるぞと注意したくなる程、大きく開いた口だ。

風神家。
極普通の一軒家である……。
同、風呂場にて、賑やかな音声が聴こえる。
プルン。弾力性のあるおっぱいが元気良く揺れる。
たゆん。もう１人目の前者より控えめなおっぱいは穏やかに、それでいてしっぽりと揺れる。
そのおっぱいの持ち主、見事な女体が２人分あった。
それは入浴中のレクとサキであった。
レクはボディソープで身体を擦り、サキは湯船に浸かり、恍惚の笑みを浮かべていた。
「大きいお風呂～。風神先輩の家、大きくていいですねぇ。あたしん家、アパートだから……」
「レクでいいよ」
「え？」

「風神先輩ってのは堅苦しいから何か性に合わないからさぁ」
「そ、そうですか……じゃ、じゃあ、レクさんと呼ばせて頂きます……」
「レクさんかぁ。風神先輩よりはフレンドリーかもねぇ」
サキは「は、はぁ」と頷きながら、レクのパーフェクトボディに釘付けになる。
気付かなかった。脱いだら凄い。
大きい胸。引き締まったウエスト……。
この人、着痩せするタイプなのかな？
などと、脳裏で推理するサキであった。
「……にしてもレクさん、スタイル良いですねぇ～」
「まぁね、毎日言われる」
それは流石にないでしょと、サキは思わずクスリと笑ってしまう。
「流石に毎日はないでしょ……」
「チ、ばれたか…」
舌打ちするも、直後に柔和な顔になるレク。
湯船につかり、ほってっているサキはふと、問う。
「あのー、1つ訊いていいですか？」
レク、シャワーでシャンプー塗れの頭髪を洗い流す。
「ん？　何？　ウチの巨乳の秘訣？」
「いや、そうじゃなくって、何でエアボーで勝つ事に拘ってるんですか？」
「ん？　おかしい？」
「いえ…ただ、気になったんで……」
レクはシャンプーを洗い流し終え、頭部を震わせ、水を散布させる。
「あたしね……屈するのが嫌いなの」
「……どういう意味です？」
「レースやゲームに負ける事も、誰かに従属するのも嫌って事。このあたしが敗北や隷属されるなんて屈辱且つ不愉快極まりないわ。そもそも、楽しい気分になれないってのが最悪！　あたし、苦しむ

為に生まれてきたつもりなんかないし！」
口をポカンと空けるサキは眼を緩める。
「……凄いな、レクさん……羨ましいな。その自我の強さ……」
「でしょ？　だって、楽しく生きていくのが誰だって一番良いに決まってるもの！」
レク、いけいけしゃしゃあと言い放つ。
普通なら「そんな事気にするな」とでも言いそうなものをこの女はどういう意図か、意図がないのか、その逆をのたまった。
「……勝つのが楽しいってのは分かったけど、何でエアボーなんです？」
そういえばそうだ。と、云わんばかりの疑問をサキは投げかける。
「フン、そんなの決まってるじゃない！　ハマったからよ！　ハマッたからやるからには勝つ！　そして、プロボーダーにもなる！！」
ボディソープで作って泡を飛ばす程の拳を握るレクであった。
彼女の瞳は輝光していた。
シンプル過ぎる。
その答えに表情が硬直するサキであった……。
「他に理由がいる訳ぇ！？　ってか、人一人の感性に理由求める事態無意味じゃない！？」
ボカンとしているサキは思わず、クスリと笑ってしまう。
レクは少々ムスッとなり、桶のお湯をサキの顔にかける。
うわ。顔面に浴びるサキ。
「何で笑う訳？」
「……あ、いや、そりゃあそうだなぁって思って……」
笑い涙を指で拭うサキ。
「あーっ！！」
唐突に叫ぶレク。
咄嗟に耳を塞ぐサキ。
「そういえば、名前もカラーリングもまだ決まってなかった！」
「何の？」

「あんたのエアボーに決まってるじゃない！」
「あ！　そっか。他の人のは名前、付いてましたね……」
「何がいい？　自分で決めな！」
頬に人差し指を指すサキは思案する。
「う～ん、色は他の人とは被らない方がいいですよねぇ……じゃあ！　イエローのボディにピンクの妖精模様がいいです！」
「ベタだけど良いんじゃない？　で、名前は？」
「う～ん……」
レクの汗が額からスルリと落下する。
同様にサキのオデコから汗が流れ落ちる。
「……シャ、シャイニングフェアリー……？」
自信なさ下にそうのたまう少女、サキ。
「うわ、カッコ付け過ぎ！　生意気ィ！」
と、腕を伸ばし、サキの胸を揉む。
「あ、あぁん！　や、やめてくださいよぉ……」
さっと、腕を引き下げるレク。
湯船に鼻まで沈んでいき、恐縮ばるサキ。
「でも、悪くない！　ウチが許可する！」
ドン！とレク嬢はサムズアップする。
「……や、やったーっ！」
両手を挙げ、高揚と共にサキは湯船から立ち上がる。
この時、レクはサキの全身を目に入れる。
サキの肢体、レクよりおっぱいは小さいもの、決して貧乳にまでは入らない大きさ。
それでいて発達しているようでしていないようなアンバランスな色気のボディに目を奪われたのだった。所謂コケティッシュといったものだろうか。
「あんた、顔に似合わず濃いカラダ、してんのねぇ～。エロッ！」
キュッと内股になり、胸を両腕で隠すサキは脳が沸騰し、赤面する。
「や、止めてくださいよぉ……」

EP．01（後書き）

珍しい？　レースモノです。
気軽に見てください。

途中評価でも構わないので、感想・質問・指摘をお待ちしています。

EP．02

第２走

１

嵐山高校は山の上に位置している。
その山は傾斜１０度ある通学するにはやや面倒な坂である。
しかし、身体を鍛えられるメリットもあり、運動部のランニング巡回コースに利用されているのだ。
無論、レク達嵐山高校エアボー部も利用しない訳がなかった。

山岳頂上までの長い階段……。
森林内に似つかわしいモーターやバーニア音が響く。
レク&クイーンサイクロンが坂道を駆け抜ける！
楽しそうで、勝負の楽しみという躍動感のある顔のレク。
とはいえ、額から汗が次々と流れる。
それだけの距離を走っているのだろう……。

その遥か下部。
広がる田園平地。
農家の老人が稲刈りをしている。
「おぉ！　いつもの兄ちゃん、やってるねぇ！」
黒い浮遊マシンとジンが田園の間の道路を一瞬に疾駆する。
軽く田園の水に飛沫を伝播させるのであった。
「……借りてます」
鍬を持った老人にぼそっと頭を下げ、真っ直ぐ突き進むジン！
ジン、厳然と身構えた表情…。何を考えているのか。彼の見ている先は何処か……。

彼は眉を釣り上げ、素早くリモコンを裁く……。

こちらは嵐山高校内、グラウンド。
その中の鉄棒エリア。人は密集していない。
そこに数々の並列してある鉄棒をジグザグに避け進む青いマシンがあった！
余裕満々な笑みで愛機、ブルースバイパーを駆り、鉄棒を避けていくコウヘイであった。
彼はテクニカル走法を終え、一旦停止する。
そして、腕時計のストップウォッチを確認する。
「おいおい、全然タイム縮まってないじゃねぇか！　これでは次の試合が思いやられるな…何としても縮めないとな……」
コウヘイは珍しく垂れた眉毛を吊り上げ、鉄棒目掛けて疾走！！

体育館裏。
大きなダンボール箱内にはスプレー跡が散漫されている。
他にも、周囲にはマスキングテープや妖精の型紙が散らかっている。
指で黄色に塗装されたエアボーを指でなぞるヒロナ。
「うん。乾いたようね。さぁて、マスキングを剥がすかぁ」
「あ、あのー」
「ん？　どうしたのサキちゃん？」
「あたし、剥がしてみたいです……」
「そ、剥がせば？」
表情が晴れ上がるサキ。
「は、はい！」
サキはマスキングテープを嬉々と剥がす。
散らかったマスキングテープの跡。
一息つくサキはにやける。……嬉しい。
何故なら自分専用に塗装したマシンが目の前にあるからだ。

黄色のボディに桃色の妖精模様の、華やかなボディが光沢を魅せる。
ヒロナ、サキの背中にポンと手を置く。
「やったね！」
「はいっ！」
両手で愛機を掴み、掲げるサキ。
「あたしのマシン、シャイニングフェアリー……」
「アハハッ、思い出すなぁ、自分のマシンを塗装して名前をつけた時の事を……」
声に反応するサキとヒロナ。
巡回していたレク、コウヘイ、ジンが戻って来た。
3人は動きの止まった愛機から降下する。
「おっ、帰って来たねぇ」
そう言うや否や、ヒロナはタオルを3人へ投げ渡す。
3人はキャッチし、汗を拭く。
「どう？　調子は？」
ヒロナの質問にVサインを見せるレク。
「バッチリよ！　サキちゃんがヘマしても3人で確実に勝つわ！」
「え？　何のことです？」
「言ってなかったっけ？　今週の土曜に他校と練習試合すんのよ！」
何時の間に！？
サキは驚き、叫ぶ。
「えぇ～っ！？　そんなぁ、イキナリ実践だなんてぇ～。あたしも出なきゃダメなんですかぁ～！？」
「当たり前じゃない。その為に一人集めたんだから」
「って、あんた言ってなかったんかい！」
ヒロナが己の平手をハリセンのように使い、レクを小突く。
「んじゃ、この際だから練習試合の事、説明するね。試合は市営のレース場で行うの。で、ルールは4人対4人のリレーレースよ！」
「リ、リレーですか……」

「そうだ。だから、お前の失態をフォロー出来るって言ったんだよ」
だらっと椅子に腰掛けているコウヘイが高圧的にそう告げ、スポーツドリンクを一気飲みする。
「それぞれの走者が走るコースは全部違うコースなの。だから、コースに最も適した走者を選ぶかが勝利の鍵となるのよ！　でも、コースもその走者ももう決めたから大丈夫よ！」
「は、はぁ……」
またもや、ありのままに流されていくサキであった。

2

当日。本日快晴・水溜りも無し。
市営公園。アマチュアコース場。
そこに戦慄の疾風が吹き荒れる……張り詰める……。
その元凶である2チームが整列し、対峙をしていた。

嵐山高校エアボー部、チーム・バンガードストリーム。
御世辞にも行儀の良い整列ではないが、崩れた姿勢と態度が相手を挑発させるに匹敵するその姿であった。
ゼッケンナンバー1、風神レク。
ゼッケンナンバー2、下垣内サキ。
ゼッケンナンバー3、倍場コウヘイ。
ゼッケンナンバー4、獅子瓦ジン。
メカニックマン、旋皮ヒロナ。
黒をメインカラー、サブカラーを青、そして朱色の炎の模様がワイルドで強烈な印象を放つ。総じて攻撃的なユニフォームだ。

一方、その反対側。
天昇高校エアボー部、ウェブエンジェルス。
ゼッケンナンバー1、世良善信【セラヨシノブ】

さらさらとした髪、ギリシャ彫刻のような掘りの深い洗練された顔を持つ美少年である。
ゼッケンナッバー2、被矢聖絵【カブリヤアキエ】
フランス人情のようなふわっとした髪が特徴の清楚な外見の少女だ。
ゼッケンナンバー3、美河淋【ミカワリン】
ショートヘアに黒い肌。ボーイッシュでスポーティな少女と印象付けられる。
ゼッケンナンバー4、佐里乃睦実【サリノムツミ】
セミロングヘアーに微少にしか開いていない瞳孔。薄暗い印象を受ける。
メカニックマン、桐尾秀正【キリオヒデマサ】
気だるそうに首を鳴らしているメガネ少年である。
以上の5人が燦然と並ぶ！
白を基調とし、黄と赤のストライヴが特徴のユニフォームが高潔さを演出する。

黒と白。
ガラの悪そうなタイプの多いチームと、総じて優等生然とした実に対称的な2チームだ。
白いユニフォームのゼッケン2番がクスリと嘲笑する。
彼女はふわりとしたブロンドのロングヘアーを後に結い、垂れ下げている。
「あ～ら、随分ユニークなチームですこと。ここ、動物園？」
そう、高慢かつ陰険に眉毛を曲げるのは2番のアキエである。
「プッハハハッ！」
釣られて笑い出すゼッケン3番、色黒ショートヘアのいかにも体育会系な少女、リン。
2人に釣られ、クスクス嘲笑う左右後部に2つ結びをした少女、ムツミ。

「止めないか！　相手に失礼だぞ！」
部長であるヨシノブの叱責に萎縮するウェブエンジェルス・ゼッケン2，3，4。
「はいはい、ごめんなさーい！」
額を押さえ、呆れるヨシノブ。彼の悩む姿も西洋絵画の如く、美しくあった。
「全く……」
一番端のメカニックマン、ヒデマサがむすっとした顔で愚痴る。
「チ、喧しい女共だ……」

対し、チーム・バンガードストリームのゼッケン2番以外不敵な素振。
「ほう、挑発に来たか……」
顎を上げ、上から目線を作り上げるコウヘイ。
あわわ。ガクガク涙目で震えるサキ。
「はぁ、敵さんはこういうタイプかぁ」
サバサバと客観視するヒロナ。
不動明王の如く、両腕を組み、眼を閉じ、厳然と往生しているジン。
「……」我、関せず。と言わんばかりだ。
そしてコウヘイ程ではないが、鼻を突き上げ、鼻息で嘲笑い返すゴーグル少女、レク。
彼女は大胆不敵にも親指を上から下へ突き降ろす。
まるでグサリと刺し殺すかのように。
何その態度？　と、その事で不快を感じるアキエ、リン。
「あんたらこそ、ウチらの強風にもがかれな！　ヘッポコ天使共！」
「何ですってぇ……」
何こいつ？　アキエの白眼部に血管が浮かび上がる。
身を張り上げるアキエを、腕を通して阻むヨシノブ。

「またか！　止めないか！」
「…部長……チッ」
一歩下がるアキエ。渋々と。
ヨシノブはアキエを嗜めるや否や、紳士的な笑みで握手の平手を差し出す。
「お互い、いい試合をしましょう！」
ハン！　レクは不敵に微笑み、律儀に彼に握手で応じる。
「どう、あたしに握られて欲情した？」
あわわ。うろたえるサキ。
うわぁ、この人挑発しちゃってるよぉ。と。
しかし、微動だにもせず、爽やかな表情のままであるヨシノブは潔白な歯から閃光を放つ。
「ハハハ、面白い方だ。健闘祈ってますよ」
そう、告げ、背を向け去るゼッケン1番の美少年、ヨシノブ。
反対に不快な表情になるレク。対称的に美しくないサマであった。
「癇に障るわ……無駄に爽やか……情報通りね。けど……勝つのはウチらだし！」
「おいこら、部長！」
バシン！とヒロナがレクをどつく。
「何、ヒロナ？」
「試合前のミーティング！　もう皆ベンチへ行ったよ！」
ヒロナがグイと指差す先にはベンチへ向うコウヘイ、ジン、サキの姿が。
うっかりと言わんばかりに、彼らを追うレク。ヒロナもやれやれと言いつつ、走る。

チーム・バンガードストリーム、ベンチ。
コースガイドを閲覧する5人。
サキはボッカリ口を開け、圧巻する。
「うわぁ～どれも凄いコースですねぇ～」

「各走者は各タッチポイントで待機するのよ！」
「でも、お互い情報交換が出来たほうがいいから…」
ヒロナはバッグから無線インカムを４人に投げ渡す。
それを拾うように手に収める４人。
「これは？」
「無線よ！　これでレース中でも仲間同士で情報交換が出来るわ！」
「へぇ～。あ、ここが電源ボタンかな？」
４人は無線の電源を押し、耳に無線を装着する。
「あ！　そうだ！　各走者は誰なんです？　もう決まってるって言ってましたけど……」
コースガイドを見せながら説明するレク。
「まず、第１走者、倍場君！　トラップや障害物アリの超テクニカルコースよ！　徹底的に相手もコースも捻じ伏せてね！」
サラサラとした長髪を掻き分けるコウヘイ。
「フ、言われるまでもねぇ。コールドゲームにしてやるよ」
「続いて第２コースは高速オーバルコース、走者は獅子瓦君よ！相手が厄介だけど、何とかリードして繋げてね！」
グッとグローブを引き、より強くハメ付けるジン。
眼は厳然と、そしてギラギラと冷静に燃え滾る。
「相手が厄介？」
サキは髪をだらんと揺らし、首を傾げる。
「そう、向こうで一番、いや、唯一厄介な相手……リーダーの、世良ヨシノブよ！」
「あぁ、あの無駄に爽やかな人…」
「彼は中学時代からもエアボーで有名だったの。何でもコーナーで圧倒的にタイムを縮めるスゴ技の持ち主なんだって」
コウヘイは馴れ馴れしくジンの肩を叩く。
「でも、こいつだって中学の時から名を馳せてるんだぜ？　それに対策の必殺走法もモノにしたモンな！」
「あぁ。必ず撃破する……」

御意。眼を閉じたまま、毅然と言い放つジン。
「第3コースはS字の連続テクニカルコース、サキちゃん！　あなたが走者よ！」
「へぇ～あたしがS字テクニカル……ってえぇ～っ！！！？」
あまりのも大声に片耳と無線のマイクを手で遮る4人。
「そんなぁ～S字テクニカルなんて……そんな難しいコース、あたしなんかに無理ですよぉ～」
サキは縋る思いで、涙眼で訴える。
よしよしと撫でるレク。
「大丈夫、出来るから選んだんだって！」
「レ、レクさん……」
「それとも何？　障害物盛り沢山のテクニカルコースと強敵相手に戦いたい？　他はもっと難しいよぉ」
「う……このままで良いです…」
前2コースはもっと嫌だなぁ。
流石にどう考えても前2コースと比べるとまだマシな為、反論出来ないサキであった。
「んで、最終コースのアップダウンストレート、アンカーはウチね！」
むむ……ジト目になるサキ。
「え～、何か一番楽そうなコース……」
「何言ってんの！　あれを見てみな！」
レクが指差した先を追う。
時になだらか、でも、時に断崖絶壁のような坂や下りのある最終コースの片鱗があった。
実にアンバランス。等間隔な部分など無い。
アップダウンがあるとはいえ、ストレートコース。極力ハイスピードで走らなくては相手に勝てないコース。その時その時の最も適切なハイスピード状態に調整を頻繁に・それでいて瞬時に最も行わなくてはいけないコースなのである。

「あんた、アクセルやスラスターの強弱調整はまだ素早く且つ冷静に出来ないんだから無理だって。それよりもずっとフルスピードの出せないS字テクニカルの方が向いてるって！！」
「そ、そう言われると……」

同時刻。
ウェブエンジェルス側ベンチ。
地団太を踏むアキエ。
「あ～もう、あの女ムカツクーッ！！　言動、行動、外見、全てにおいて不愉快だわ！」
「あ！」
ボカンと口を開け、対戦表を見るリン。
「どうしたのリン？」
「アキエ、あんた、あの女と対戦するみたいだよ。ほら」
ひょいと対戦表をアキエに渡す。
対戦表に入り込むように見入るアキエ。
「アンカー、ゼッケン1番、風神レク……ホントだ」
アキエは紙をくしゃくしゃに丸め捨て、全身に焔を纏う。
「直接勝負、それにアンカー……面白い！　あたしが直々に潰してあげるわ！！」

3

スタートラインにコウヘイとムツミが待機。
コウヘイは飄々と首を鳴らす。
ムツミは余所余所しい印象。
第2バトンパスエリアにはジンとヨシノブ。
ジンは腕を組み、眼を閉じており、厳然と沈黙。
ヨシノブは爽やかな笑みで待機。

第３バトンパスエリアにサキとリン。
リンは「１，２，３，４♪」と掛け声を付けながら呑気に両脚のストレッチしている。
興味本位で周囲を見回すサキはエリアにある中継テレビに気付く。
「あ！　テレビ！　皆映ってる！」
テレビには４分割構成の映像、それぞれの待機地点が映されていた。
そこにレクの通信が入る。
「そうよ！　それでレース状況を確認するのよ！　それに右下にタイム表が出るからね！」
「へぇ～」
「んじゃ、皆よろしくね！」
「あ、はい…」
「あ～ら、もしかして素人付き？　これじゃ、試合にならないんじゃない？」
「ハン！　リーダー以外、ゴミクズのヘッポコチームに言われたくないねぇ！」
レクＶＳアキエの罵倒がサキの耳に届く。
「？…喧嘩してるのかな……？」

そして、アンカーバトンパスエリアにレクとアキエが待機。
レクとアキエは概に顔芸で死闘を繰り広げていた……。
激しい睨み合い。飛び散る稲妻。歪む顔。
……凄絶だ。色々と。

一方でヒロナとヒデマサはレーススタートの準備をしていた。
スタートシグナルの電源を入れるヒデマサはその事をヒロナに伝える。
ヒロナは了承、コウヘイ、ムツミを見やる。
「２人共、用意はいい？」

２人の第１走者に緊張が走る。
ヒロナはスイッチを入れ、赤色のスタートシグナルが点滅し出す。
「レディ……」
片方の足をコンクリートに、もう片方の足を愛機に乗せている２人の第１走者。
青緑のシグナルが輝光！！
「ゴーッ！！！」
掛け声の終了一歩手前位で地面を蹴り上げるコウヘイ、ムツミ！
数秒コンクリートを走行し、スラスターのスイッチを入れ、ボードは浮上！
赤いシグナルは増えていき……
そして、アクセルボタンへ指を伸ばす。
コウヘイ＆ブルースバイパーとムツミ＆サリエルランサーは天へと駆ける！
まずは直線！　流れ走る２機！
しかし、突如コースレーンから障害棒が飛び出る！！
忘れてはならない。
そう、ここは障害物盛り沢山のテクニカルコースなのだ！
「フ、こんなもの！」
リモコンを華麗に裁き、ボードが上昇！
ひょいと飛び越える！
コウヘイとブルースバイパーは何なく突破！
その後方……。
それを怨念たらしく凝視する瞳……。
対戦相手、ムツミの瞳であった。
彼女はリモコンを捜査し、愛機、サリエルランサーを上昇させ、障害物を飛び越える。
しかし、驚く事にその動作はコウヘイのやった走法と『全く同じ』型であったのだ！！
後方をチラと見るコウヘイ。

「？…まさか……ま、気の所為か…」
今度も障害棒が出現！
しかし、今度は別々の高さの棒が２つ！　しかもその感覚はしゃがんでも通れないような狭さ且つ、上昇するには高過ぎて今更加速・浮上しても間に合わないものであった。
だが、コウヘイの顔に焦燥など微塵にもなく、余裕あり気だ。
「はぁっ！」
それは見る者全てを震撼させると言っても過言ではないものであった。
彼はＳＦアクション映画のワイヤーアクションさながら、身体を後へ極端に倒し、２つの障害棒をスレスレで通過する！
直後、リモコンコードを引っ張り、元の体勢に戻るコウヘイ。

テレビ越にその走行を目に焼き付けるサキ。ゴクリ、息を呑む。
「す、凄い……こんなのあたしには無理……」

ムツミはまたもや後でコウヘイを凝視していた。まるで呪うような顔で。
そして同じく２つの障害棒に直面する。
ムツミはコウヘイと同様のえびぞり回避で２つの障害棒を抜ける！
今度こそ間違いない。
そう、全く同じ走法であった。

舌が乾く位口をポカンと開け、絶句するレク。
「嘘でしょ！？　倍場君と全く同じ……」
「どぉ～？　驚いたぁ！？」
誇らしげに口を歪ますアキエ。
「あんたさっき、ウチのチームをリーダー以外雑魚って言ったよね？」
「……？」

「それは違うわ！　ウェブエンジェルスは全員、エキスパートよ！」
「へぇ……」
「例えばムツミ！　彼女はトレース走法の達人……どんなエアボーダーをも真似出来るの！　つまりムツミと相手するという事は自分自身と戦うって事！」
「ハン、真似しんぼなんて随分セコイ輩じゃない！　独自性もプライドも無い訳ぇ！？」
「下らないわね……勝てばいいのよ勝てば……」
聞く耳もたず。不遜を示す顔芸と共に一蹴するアキエ。
が、反論をせず、厳然と沈黙するレク……。

ムツミはコウヘイとの距離を縮める。
「へぇ、俺の走りを真似るとは随分な事をしてのけるなぁ」
「……物真似は得意だから……」
ぼそっと覇気無さ気に口を開くムツミ。
「あたし、勝つから……勝たないと、アキエちゃん達に喜んで貰えないから……」
「は？」
ムツミは思い起こす。ウェブエンジェルスに入部した時の事を。

……そう、あれは1年ほど前。
ムツミは高校生になり、アキエとリンと友人になった。
その2人が入りたい部がエアボー部・ウェブエンジェルスだった。
3人は友情の印として同じものを買い、同じ行動をし、共有するなど、殆どの行動を共にしてきた。いや、ムツミが必死で2人の真似をしていたのだ。
思えば小さい時から友人関係を持つ為に必死で真似した。
流行。友人。口調……。
次第に真似事が特技となっていた。

故に自信はある。彼女に負ける気など毛頭無い！
ムツミ、キリッとした面持になり、リモコンを操作。
サリエルランサーから火炎が噴出し、加速！
……しようとしていた。だが！
ブルースバイパーがピッタリブロックするではないか！
「フ、さぁて、ブロックも真似出来るかな？」
「！！　何ですって！？」
ムツミ、虎視眈々と眉間に皺を寄せる。
そうしている間にコーナーへ差しかかる。
ピッタリとブロックを維持しつつ、コーナリングするコウヘイ。
「く、次のコーナーで！」
「ハン、無駄、無駄ァ！」
新たなU字ヘアピンコーナーへと差し掛かる！
ここだ！　ムツミはインを狙う！
ジリジリと這うようにコーナリングしていく……順調に思われた。
だが！　目の前に青いマシンとスタイルの良いチャラ男が現れ、目的を駆逐される。
「甘い、甘い。コーナーで俺に勝とうなんて考えただけでも恥だぁ！」
「く、抜けない……」
「ハン！　どの道テメェは抜けないんだよ！」
「何っ！？」
「追うだけでレースは勝てないって事だぁ！　何せ、レースは追い越して勝つんだからなぁ！！」
バーニアが更に噴出！！　ブルースバイパーは加速！
サリエルランサーを引き離しにかかる！
負けじと加速するサリエルランサー。
次のセクションに到着！
大型扇風機が反対方向から吹き荒れる！
目の前には多数の障害棒とそれに掛けられた旗が鬱陶しく靡いてい

るではないか！
コースの先も見えぬ不気味なセクションである。
コウヘイ、コースを見るや否や不敵に微笑む。
清々しい程に焦燥も危機感も全く無い。
　彼は口笛を響かせ、毒蛇の如く一瞬に舌で口元を嘗めずり回す。
そして「面白い……見せてやる！！」と呟く。
　対戦相手・ムツミはまたもやコウヘイを凝視。
　だが、彼女は凝視を忘れる衝撃を覚えるのであった！
　嵐のように速く、小刻みに調整操作されるリモコン！
　それに呼応するブルースバイパー。
　するり、するりと僅かな隙間を潜り抜け、時に旗を潜る前に空いた手で掴み上げ、駆け抜けていくコウヘイ！！
まるで毒蛇の如く、滑らかでいて素早い潜り抜け技を披露する！！
「ひゃっはぁ！！　バイパードリフトッ！！！」
コウヘイは技名を高らかに叫び、ムツミを引き離す。
旗の所為でもはやコウヘイを見失ってしまうムツミであった。

　もはや敵にすら値しないと言わんばかりにコウヘイは嘲りながら前だけを悠々と眺める。
「ハン！　格が違うんだよ格が！」
一瞬、コウヘイの脳裏に己の過去が蘇る。
中学生時の苦い敗北の連続……。
それは勝利の光など微塵にも見えぬ負のスパイラル……。
何度も、何度も地面に額を叩きつけ、苛立ちを吐露した事か。
その屈辱の歴史に終止符を討つべく、単身渡米した数年前の自分の姿である。
顔は現在と違って幼くあるのは当然だが、今のような余裕のあるニヒルな表情ではなく、勝利の美酒を求める獰猛な大蛇のような表情であった。
しかし、現在は間逆の清々しい顔である。

風を受けて走行中な為、一層そう思えるものであった。
全くヌルイんだよ。
真似しただけで勝てる程、勝負の世界は甘くなんかないんだよ。
勝ちたいんならジャングルにでもアメリカにでも飛び込めってんだ。
それが出来ない。いや、する気のない奴なんかに勝利が転がり込む
なんて万に一つも無いっつーの。
ハン！　お笑いダゼ！
高揚を堪えられず、鼻を突き出し、高笑いするコウヘイ。
だが、直ぐに止み、燦然とする。
そう、己の使命がまだ残っているからだ。
「……だが、こっちはなるべくリードして繋げなきゃいけないから
なぁ……そろそろ独走させて貰うぜ！！」
リモコンカバーを指で圧するように開き、新たなボタンを操作。ブ
ルースバイパーの左右からディフィーザーが出現し、フレキシブル
に内部ファンを動かす！
大・加・速！！
最後の地面から棒や壁が突き出る障害も毒蛇の如く、すり抜ける！
ようやく旗障害物エリアを突破し、ムツミはようやく対戦相手の後
姿を目にする。
「う、うぅ……」
どんどんコウヘイの姿が小さく、見えなくなっていく……。
ダメだ。ダメだ。
もう追いつけない。
屈するしかないムツミであった。
その証拠に目じりが萎え、唇を噛み締める。
対称に爽快な余裕しゃきしゃきのコウヘイは尚もスピードを落さな
い。
そして、コースを捻じ伏せたコウヘイの目の前には待機中の男２人、
ジンとヨシノブの姿が見えた！

各テレビモニター前でコウヘイの独走に歓喜するヒロナ、サキ。
そして、ガッツポーズを取るレク。
「おっしゃー！　サッスガ倍場君！！」
地団太を踏み、悔しがるアキエ。
「あ～もう、クッソ！　あのチャラ男、速過ぎだっつーの！！」
厭らしくアキエを眺めるレクは嘲笑する。
「プッ、残念でした～！　倍場君は昔、エアボーの発祥の地、アメリカで武者修行したのよぉ！」
「…ムカツク……」
屈・辱！
脳を沸騰させ、歯軋りするアキエであった。
レクはタイム差を確認する。
タイム差は現在、２分５８秒３３。
相手が見えないほどのリード。
まさに圧勝である。
　ニヤリ。
　結果を出し、爽快な顔のコウヘイがバトンパスエリアへ来る。
「ハハ、リードし過ぎたかな？」
「リードし過ぎて悪い事は無い……」
呟くようにそう返答するジンは平手を挙げる。
「まぁな」
コウヘイも平手を挙げ……。
「じゃ、次頼むぜっ！！」
コウヘイとジンは平手をぶつけ、タッチを交わす！！
その数瞬後、ジン&シャドウスナイパーはフル疾駆する！！
コウヘイはスピードを緩め、ボードから降りる。
「頼むぞ……あいつに勝てるのは……ジン、お前だけだ……」
コウヘイの厳然とした視線の先はリードされているにも関わらず、
涼しげな顔をした天使のような美男子、世良ヨシノブの姿があった。
どうやらこやつ、先程の見事なテクニックを披露し、その上、独走

した男、コウヘイですら一目置く輩らしい……。

4

高速オーバルコースを駆けるマシンが1台あった……。
黙々と、それでいて凄絶な速さで疾走していくジン&シャドウスナイパーである。
先程のテクニカルコースでは元々、大してスピードを出せないコースで、一方こちらは高速オーバルコース。
その為、コウヘイ達よりも速い走行なのは必然である。
どんどん疾駆するジン。速さの余り、彼の視点では周囲が一方向の複線と見えるのであった。
リードしているものの、彼の顔に緩みは無かった。
寧ろ警戒している。身構えているのだ。

一方、第2バトンパスエリア。
ムツミ、息を切らしてヨシノブにタッチを交わす。
「ぶ、部長…ゴメンなさい……」
「いや、面白くなった。礼を言うよ」
煌びやかに微笑み、セラヴィーバリスタのバーニアを飛ばすヨシノブ。
「よし！　行くぞ！　セラヴィーバリスタッ！！」
猛追開始！
ヨシノブは風を引き攣れ、急行する。

先行するジン、テキパキと無線を操作する。
「風神か。今、どうなっってる？」
「さっき、世良ヨシノブが出発したわ」
「……タイム差はどうだ？」
「えーっとね…！！」

モニターを見やり、確認するレクは絶句する。
そんなまさか。信じられない。
現在のタイム差、２分１０秒１７。
ヨシノブがスタートするまでは２分５８秒３３。
ヨシノブのスタートから１分前後しか経過していない。
にも関わらず、その僅かな時間で４８秒近くも縮められたのであった！
「…現在、２分５８秒３３……いや、５５秒４２…約５０秒縮めて来てるわ！」
ジン、眉間に皺を寄せる。
「…やはりな……」
「ヤバイわよぉ、これ！　容赦なく飛ばして！」
「…言われるまでも無い！」
何の！　と、アクセルボタンを押し、更なる加速をするシャドウスナイパー。
だがしかし、目先には高速コーナーがあるぞ！

おろおろと小動物のように危惧するサキ。
「え！？　コーナー前で加速！？　危ないんじゃ…」
「大丈夫！」
ヒロナが自信満々に通信する。
「へ？」
「獅子瓦君には『アレ』があるから！」

高速コーナーへ加速しながら向うジン！
無謀だ！　……と、普通はそう思うだろう。
「……」
無言でジンはコウヘイ同様、リモコンカバーを開き、そこに隠されしボタンを操作。
ズンと踏み込むジンの両足……。

シャドウスナイパーは左右のカナードウイングを前斜めへ傾かせる。
そして、ジリジリと慎重に傾いていく……。
準備は整った！　もはや上げたサイドウイングは風の壁と化す！
タイミングを計算し、シャドウスナイパーはコーナーフェンスにピッタリ這うように徐々に減速せず駆け抜ける！！
斜めに傾いて走った事で、アウトコーナーをスロープのように突破したのだ。

「あれがジンの必殺走法、ダウンフォース走法だ！」
コウヘイは自分の事のようにドヤ顔で説明する。

「どう？　驚いた？　彼、ウチの秘密兵器なの！」
己の豊満な胸を突き出し、鼻息を噴出。レクも同様に自慢していた。
アンカーバトンパスセクションでコース整備をしているヒロナにヒデマサ。
ヒデマサは煩わしそうにレク達の自慢話を聞く。
「どうでもいいが……自慢好きだなこいつら」
無口なメカニックマン、ヒデマサはメガネを掛け直し、そうぼやくのであった。
何か情報収集でもあれば。と、聞いてみたのだが、見当違いだったようだ。

コーナーを通過し、再び直線へ向うジン。
「…よし……」
「アハハハッ！　見事なコーナリングだったねぇ！」
まさか！
狼狽の色が若干見えながらも声の元へ眼を向けるジン！
「！！　馬鹿な！」
来た！　確かにヤツは来た！
幻ではない。

くっきり姿が見える程の距離では無いものの、目の届く範囲の後ろにヨシノブが居るのだ！
「グ…何時の間に……」
「いやぁ、大変だったよタイムを縮めるのは……でも、こっちだって負けに来た訳じゃないからさ！」
「ヌゥ……」
小癪な！　ジンはバーニアダイヤルをＭＡＸにする！
ヨシノブもバーニアダイヤルをＭＡＸに！
２機から発する轟音！　炎の噴出！
もはや肉眼で追う事など困難な速さの域に突入する！

あり得ない…。
愕然とするレク達バンガードストリーム。
「獅子瓦君も全力で走ってた……なのにどうやってあんなに差を縮められた訳！？」
「レク！」
「ヒロナ？」
ヒロナはパソコンで分析をしている。
「さっき、獅子瓦君がコーナリングした時、皆、世良ヨシノブの事見てなかったでしょ？」
「あ、うん……」
「あいつはね、最初から『ずっと内側だけを走り続けていた』のよ！」
「内側！？」
「そう、スタート開始からね」
「そっか、オーバルコースにおいて、内側をずっと走れば一番短い距離を走る事になる……小賢しい真似をしてくれるじゃない！」
しかし、符に落ちないレクであった。
「ん？　でもその程度であんなに追いつける？　おかしくない？」
「うん。勿論されだけじゃないわ。見て」

ドン！　ヒロナはレクにパソコンを見せる。
先程までのレースが収録されている。
んなっ！？　嘘でしょ！？　衝撃が身に奔るレク！
「！！　これは！！」
思わず息を呑むレク。
「これはヤバイわ……良くて同着タッチかも…」

直線を突き進むジン、その後方のヨシノブ。
両者、フルスピードだが、少しずつヨシノブが迫っていく。
この理由をぶつくさと推測するコウヘイ。
「……そうか、ジンは体がデカイ分、体重があってその分、トップスピードは劣るんだ。身長は同じ位だが、どう見ても世良の方が細身だからなぁ…まぁ、体重のお陰でダウンフォース走法が出来るのだが……更にダウンフォース走法は遠回りであるアウトを回るのに対し、世良はインを突く……差を詰められて当然か……」
誰よりも焦燥するジン。
「…拙い……このままでは追いつかれるのは目に見えている…」
そう考えるうちに、またもや高速コーナーへ差し掛かる。
「だが！　こちらも全力を尽くすまでだっ！！」
ノンブレーキのまま、アウトコーナーへ向い、ダウンフォース走法を実行！！
コーナーを通過するジン。コーナーにエッジを刻むのであった。
が、その横には信じられない光景があった！
ジンは絶句するしかなかった。
「！！　何だとっ！？」
ヨシノブはセラヴィーバリスタを回転させ、ジャンプ！
セラヴィーバリスタはインコーナーをピッタリ回転しながら通過し、
その間ヨシノブはコーナーを飛び越える。
これは曲芸か？　ここはサーカス場か？
もはや反則的な領域だ！

そう、この無茶苦茶なイン・コーナリングこそ急激な追い上げの要因であったのだ。

コウヘイ、サキは目を疑う。
「馬鹿な！」
「あり得ない！！」
レクは眉間に皺を作る。
「ふざけてる…あんなの反則よ！」
アキエ、髪を掻き流し、嘲笑しながら自慢気に言い放つ。
「どう？　ウチのリーダー、世良君の必殺走法、セラヴィー・ツイストターンよ！」
「セラヴィー…ツイストターン……」
圧巻・圧倒。表情が固まるレクであった。

「ふぅ、ようやく君の真後ろに立てたよ」
ジンが反応する先には今度こそはっきりとヨシノブの姿があった。
見たくないが、見える。
ヤツは笑っている。実に小憎たらしい。
「このまま追い抜かせて貰うよ！」
屈託の無い顔で宣戦布告するヨシノブ。
「……ヤロ……」
不穏立ち込む表情……ジンの瞳孔に殺気が増大する。

「いける！」
「追い抜いちゃえーっ！」
と、アキエとリンが高揚する。グググッと拳を握り、天へ突き出す。

「……冗談じゃないぞ……」
ジンは焦燥を振り払い、思案に尽力する。
ゴールが肉眼で判る位置……つまり、バトンタッチまでもうすぐ

だ。
だが、このままでは追いつかれる。
現状のままなら何とか同着は出来るだろう。
しかし、それでは次の走者であり、経験値の最も低いサキにその形で繋げるのはこの時点で敗北を意味している。
それでは拙い。
いや、そもそもそんな屈辱は己自信が許さない。
何としても、なるべくリードして終えなくては。
俺はそう仲間に託されたんだ。
なぁ、そうだろシャドウスナイパー！？
いや、託されなくても勝利以外は認めない。敗北などゴメン被る！！
「……ふざけるな……」
！？　ただならぬ気迫を感知し、警戒するヨシノブ。
「……ふざけるな！　俺は圧勝する！！」
ジンは減速し、ヨシノブの真ん前に移動……。
そしてマシン同士をぶつける！
衝撃にややよろめくヨシノブ。
「！！　何を！」
ヨシノブだけでなく、レク達も驚きを隠せない！
「潰れろ！！」
シャドウスナイパー、バーニアをＭＡＸバースト！！
その勢いに押し飛ばされるヨシノブ、セラヴィーバリスタ。
ふらつき、後退するもボードからは降りない。
ヨシノブの実力の賜物であろう。しかし、ヨシノブが舌打ちをし、顔を上げた時には既に小さくなっていくジンの後姿があった……。
「クッ、こっちだって負けられないんだ！」
ヨシノブは体勢を建て直し、追撃する！
ジンは風を切り裂き吹き進む。
その後方、追走するヨシノブ……。
そして最終高速コーナーに……到着！

ジンは真摯な沈黙……。しかし、眼は荒々しかった。
ヨシノブは一転、焦燥と歪みある表情……。
「あんな卑劣なヤツに…あんな卑劣なヤツに負けられない……」
ジンはノンブレーキコーナリング・ダウンフォースドリフトで制覇！
離されてなるものか！！　奮起したヨシノブがそれに続く。
ヨシノブは再びボードを揺らし、回転を与え、自身を飛翔させる。
「これで追いつい……」
しかし！
「しまった！　タイミングが！」
ヨシノブはボードにではなく、地面に落下する。
沫や、自爆。こんなところで失態を冒すとは。
ヨシノブは歯を噛み締め焦燥の念に駆られながらも、愛機を追う。

「あぁ……」
悄然とするアキエ、リン、ムツミ。
ん？　モニターを眺めているサキはふと引っ掛かる。
「あれ？　ボードから落ちちゃっても失格にならないんだ……」
「そうよ。F1だってコースアウトしても失格にならないでしょ？」
「そ、そうなんですか」
「でも、だからといってコースアウトばかりしないでねサキちゃん。タイムロスになるから」
「はい……気をつけます……」
成程。サキは緊張し、意気込む直後にハッとなる。
「あ！　来ました！　じゃ、頑張ります！」
「お願いね」
独走するジンが接近……。どんどん彼の姿が鮮明になっていく。
「行くぞ！」
「はいっ！」
バシン！　ジンとサキは平手を交わす！
凛と身構えるサキ！　コウヘイさんトジンさんのリード、無駄には

しないっ！
「いくよっ、シャイニングフェアリーッ！！」
地面を蹴り上げ、サキ&シャイニングフェアリー発進！！
顔を回し、汗を振るい、忙しい呼吸をするジン。
「ご苦労だったな」
飛来するスポーツドリンクのペットボトル！！　それを掴むジン。
チラと見やるとコウヘイが居た。
「運が良かった……奴が自爆してくれたお陰でリードしたまま渡せた……。だが、お前のリードを縮めてしまった……」
険しい表情のままのジンはキャップを空け、一気飲みをする。
「なーに、相手が相手だけにリードして繋げられただけ、儲けモンだぁ」
コウヘイがのほほんとストレッチしながらそう答える。
「……」
ジンは飲みながら朦朧と第3コース側を見やる。
サキが転げそうなところを、必死でバランスを取って走行している
何とも頼りない光景がそこにあった。ふ、不安だ。
「…もっと、リードした方が良かったか……？」
悪寒と共に眉を引き攣らせるジン。
コウヘイは両平手を左右に仰ぐ。
「ま、アンカーに風神が居るんだし、何とかなるっしょ！」
「…だと良いけどな……」
ジンは渋々眼を細め、再度、淡々とスポーツドリンクを飲む……。

EP．03

第3走

1

サキは短い直線を駆け抜ける。
そして遂に連続S字コーナーへ差し掛かる。
うねりにうねった連続S字コーナー……。
走るだけで目が回りそうだ。
そんな悪寒がする。
ゾゾゾッと青褪めるサキ。
「うわぁ～、もう直線終わっちゃうよぉ～。嫌だなぁ～」
サキはリモコンを操作し、スピードを緩める。
低速ながらも確実にコーナーを曲がっていく。
サキは現状を危惧していた。
「どうしよう……。こんなに遅いと追いつかれちゃうかなァ……
でも、コースアウトして一旦走るのを止めちゃうと更に遅れちゃうし……」
悶々と困惑に包まれるサキであった。

悄然としたまま朦朧と走るヨシノブは第3走者、リンの元へ急行。
「…すまない……」
ヨシノブは浮かない顔で頭を下げる。
予定の結果を出せなかったから当然だと言わんばかりに美顔が萎える。
リンは元気ハツラツな笑顔でサムズアップする！
「ドンマイ、ドンマイ！　タイムは縮めたんだし、気にしない、気にしない！」

激励を受け、ヨシノブは表情が緩む。部長がこんな態度じゃいけないな。強気な顔で仲間を見送ろうと、表情を心機一転するヨシノブであった。
「……頼むぞ！」
「当然！」
両手が叩かれる音が天に響く！

同時刻。
サキはチマチマと実にたどたどしくコーナリングしているのであった。
「あ、あのー、ヒロナさん？」
「ん？　何？」
「タイム差、縮められてます？」
「えーっとね……いや、さっきスタートしたばかりだから、まだ分からない」
何だ。ふぅ。安堵に脱力するサキ。
「まぁ、ヤバいと思ったらこっちが伝えるから！　サキちゃんは気にせず、レースに集中しな！　どうせ余裕ないんでしょ？」
「は、はいっ！」
眉をV字にし、慎重にコーナリングする。ゆるり、ゆるりと数分ほど先行する。
「ひぃやっほぉ～！！」
ビクリ。無駄に大きな声が耳に入るサキ。
「え！？」
スナップを利かせたボディバランシング！
それに呼応し、ジグザグに踊るミカエルキャリバー。
スイスイ波乗りのようなコーナリングで突き進むリン！
まだまだ、顔がはっきり見える程ではないが追い上げるリンの姿を目に入れるサキであった。
「うわぁ、来たよぉ～！」

「あ、ホイホイッとぉ！」
リンは軽快にコーナーを潜っていく。
怪訝な表情のレク。
「速いわね…あいつ、一体何者……？　思わぬ伏兵ってヤツ？」
難しい顔をしてヒロナはパソコンで調べている。
「おっかしいなぁ、あんなヤツ、データに無い……あんだけ速いなら有名な筈だと思うんだけど……」
胸を突き出し、偉そうに説明するアキエ。
「フン！　当然よぉ！　だってリンは陸上部だもん！」
「陸上部……」
「そう、だから正式な部員ではない。つまり、助っ人って事」
レクは鼻から嘲笑をする。
「フン、助っ人借りなきゃいけない位、オタク人材不足なんだぁ～。嗤っちゃうんだけどぉ！」
漫才宜しく、容赦なくレクをどつくヒロナ。
「って、ウチらが言える事か！！」
それを言うなと、頭を抑えるレク。
「痛った、もう本気で叩くなっ！」
「ゴメンゴメン……」
ドウドウ。と、平手を前方に仰ぐヒロナ。
その漫才に失笑を堪えきれないアキエ。
「ンプッククク！　オタク、お笑いチームとしてなら一番かもね。それだけは負けるわ……」
対し、胸を張って強気な顔で出るレク。
「あんたらが負けんのは全てにおいてよ！　泣きっ面、写メってやるんだから！」
「面白い提案ね……いいわ、乗ってあげる。負けた方全員の惨めな面を撮る……受けて立とうじゃない！」
「その言葉、後悔しない事を前提に言ってんの？」

「当然よ！」
レースこそまだだが、既にレクＶＳアキエは始まっているのだ。
そして火花を散らす。
「ちょっともう～２人共勝手ねぇ～」
溜め息を吐き捨てるヒデマサ。
「何てことしてくれたんだあのバカ女は……」
……まてよ。じっくり思案するヒデマサ。
もし負けたら自分もそれに付き合わされる。
それはカンベンだ。
ヒデマサは周囲を何度も、何度も確認し……茂みに消える。
「あ……」
消え去るヒデマサに唯一気付くヒロナ。
しかし、彼女は止める事もチクる事もしなかった。
何処か罪悪感があったからだろうか。
彼女は苦笑を浮かべ、見て見ぬフリをする。

肝心のレースはというと、やはりサキは徐々にリンに追いつかれていた。
段々、互いの姿が大きく、鮮明に見え始める。
意気消沈。涙目でクネクネコーナリングするサキ。
「うわぁ～ん、どうしよぉ～！」
対称に軽やかなステップで曲がり進むリンとその愛機、ミカエルキャリバー！
「あ、ホイホイっと！　な～んだ、結構楽勝ジャン？」
「余裕かますなら、追い抜いてからにしてくれ」
ヨシノブの注意を受け、はいはいと適当に応対するリン。
だが、確実に追い上げているのだ。
あとは平常心あるのみ。
リンは意気揚々とリモコンを操作。
スピードを少ない直線の時は上げ、コーナーに差しかかると緩め、

差を縮めるべく尽力している。
そう、どうやら外見ほどふざけた人間ではなかったようだ。
そんな彼女の存在がサキを次第に圧迫していった。
どうしよう。
どうしよう。
このままじゃ追いつかれるよ！
絶対追いつかれるよ！
額から落ちる汗。唇が乾く……焦燥するサキ。
「な～らんだっ！」
「！！」
サキは血の気がサァッと引く。脊髄反射的に。
それもその筈。何故なら隣にリンが並んでいるからだ！！
「うっ！」

眼を閉じるジン。万事休すか……？
「ク……」
頭を抱えるコウヘイ。何てこった。
「あちゃぁ～並んだかぁ」

レク、〔ワザとらしく〕驚きを意味する顔芸を披露する。
「げぇっ！？　並んじゃったぁ！！」
そうだろう、そうだろうと、厭らしく口を曲げるアキエ。
「フフッ」
諦めを悟ったヒロナはレクに重く、肩に手を置く。
「レク、あんたしっかり取り戻すんだよ」
ニヤリ。
唇を寝転がった三日月状に描くレク。
「ヒロナァ、ウチがあの子を選んだ理由が分かってないようねぇ～」
「え？」

哀れ。
今度はサキが引き離されていく……。
グイグイ、グイグイと。
圧倒！　歓喜し、ガッツポーズを取るリン。
「大～逆転～！！」
悄然と震えるサキ……。
ポロポロと涙を溢していく…。
「う、うぅっ……。どうしよう。アンカーにレクさんが居るけど、圧倒的に引き離されたら流石に逆転は出来ないと思う……追い抜かなきゃ！　いや、それが無理でもせめて同着ゴールでもしなきゃ！」
無意識的にサキはアクセルダイヤルを弄っていた。
「倍場さんや獅子瓦さんが作ったリード……絶対に無駄にしちゃいけない！　やらなきゃ！　だってあたしはエアボーダーだもん！！」
涙を散布しつつも、叫び上げるサキ！！
大声に思わず反応するリン！
「！！」
サキは涙を散布し、狂乱的に叫びがらもコースを走る！
その勢いはこれまでより速く、ワイルドなものであった。
無意識的にリモコンをテキパキ操作し、尚且つＳ字コーナーを狂乱的・暴虐的に進行していく！

キター！！　ガッツポーズを取るレク。
「おっしゃぁ！　来た来たァ！！　これを待ってたのよぉ！！」
ヒロナは問う。
「まさか、これを？」
「そう！　まぁ火事場の馬鹿走りとでも言ったトコかしら、あの子の無意識反射運動による走法よ！！」
クスリと笑むヒロナ。
「成程ね……ホントあんた、容赦ないね…」
「当然！　だって勝つ為に試合するんだから！」

唖然と静観するジン、コウヘイ。
「おいおい、これは番狂わせだなぁ～」
「うむ…どうなるか見物だな……」

頬を引き攣らせ、呆気になるリン。
「な、何これ……」
サキの珍妙な走りに嗤えるかも知れないが、嗤えない。
現実、グイグイ追い上げて来ているのだから。
「フン！　今更抜かれてたまるかっつーの！」
リンとミカエルキャリバーは加速する！

コーナリング大戦！！！
前に居る走者を捉え、追撃するサキ！
後は見ないが、気配を察知し、逃走するリン！
追い付いていくサキ！　まるでマシン同士が糸に繋がれていてその糸が引っ張られるようだ。
させるか！　引き離しそうとするリン！
電光迸る激しい攻防！
遂に2人、2機は並び立つ！！
リン、流石に癇に障る。
「んなっ！？　くっそ、並ばれてたまるかっての！」
リンは横へ傾き、勢いを稼ぎ、サキへアタックを見舞う！
ドグシャアッ！！　衝撃に耐えるサキ。
「もういっちょう！！」
「いやぁ～つ！！　来ないでぇ～つ！！」
吹き上がるシャイニングフェアリーのスラスター！
急上昇し、リン&ミカエルキャリバーの攻撃を回避する。
「んなっ！？」
今度は上からアタックを試みる！

が、サキは悲鳴と共に回避！
次は左からアタック！
しかしこれもまた下へ回避される。そうしている間に両者はクラッシュし、コーナーフェンスへ激突する！　鈍い衝撃音が点へ響く。
そんな……ヒロナ達は顔を濁す。
「あちゃぁ～」
レクは即座に連絡を取る。安否を確かめるべく。
「サキちゃん！　大丈夫！？　サキちゃん！？」
「あ…大丈夫です……続けられ…ます…」
それは消え入りそうなか細い声だった。
「サキちゃん……」
「あらあら、マジじゃないのあの子」

連続S字コース。
よろけながらも立ち上がるリン、愛機ミカエルキャリバーの電源を入れ直し、再走！
少し遅れ、愛機シャイニングフェアリーを再び起こし、電源を入れ、追走するサキ。

……アンカーバトンパスエリア。
ズンと両腕を組み、往生し、待ち構えているレク。
対照的にモデル立ちをしているアキエ。
そこに2つの浮遊物が飛来！
朦朧としながらも、抜きつ抜かれつの激しい攻防を展開するサキとリンであった。
「もう少しよ！　もう少しよサキちゃん！」
「リーン！　あとちょっと！」
アキエ、ムツミも応援を送る。
男性陣は口にはしないが、眼で応援する。

朦朧と、消え入りそうな表情のサキ、笑顔を無理矢理作り、
「レクさん……すいません…後は…頼みます……」
落ちて行くサキの平手。
その先にはレクの平手があった。
「サキちゃん、あんた、よくやったよ……」
サキは消え入りそうな笑顔になる…。
キリッ！　レクは男前な表情……。
「御褒美に勝利をプレゼントしてあげるからね！」
２つの平手が触れ合い、１人の人間の疾走と１人の人間が倒れる。
ガシャン！　ゴーグルを目元へ装着！
レクは最終コースと言う名の戦場へ身を投じる！

そのほぼ同時にアキエが駆け抜ける！
「風神レク！　勝負よ！！」
「ハン、かかって来な！！」
と、レクは挑発を表現すべく、人差し指を上へ突き出す！
そして、２つの影が消え去っていく……。
疾風と轟音と共に……。

2

聳え立つ不気味かつ歪なアップダウン……。
最終コースに相応しい威圧的なコースである。
「さぁて、勝負は五分と五分、泣いても笑ってもこれが最後！」
しれっと言い放つレク。
対し、アキエは悪態を着く。
「泣くのはあんただけどね！」
「悪いけど、ウチ、泣いた事無いし！　つか、泣くのはあんたでしょ！　脆そうだモンねぇ～。く・ず・れ・る・と♪」
憤慨！　メンチ切った顔で歯軋りをするアキエ。

「泣かす！　絶対泣かす！」
そう言いながらも、激しいアップダウンをレールウェイのように張り付いて走り抜いて行くレク＆クイーンサイクロン！　アキエ＆ガブリエルアロー！
しかもそれでいて、互いに最高速で疾駆している。
これではもはや、ジェットコースターを自ら運転し、搭乗しているようなものだ。
２人は揺れる。
その上下の衝撃にとにかく、無駄に揺れる。
髪、乳、スカート…もはや、お洒落も台無し。
『ワヤクソ』である。
２人共、喧嘩腰で始めた故、弱気な顔など見せられない。
頬を中心に顔の筋肉をフル活用し、強がる。
「ヤッバァ～酔って来た……ゲロ出たら、この女に吐こっかな……」
脳裏でそう考えるレク。
「拙い……予想以上に気持ち悪い……吐きそうになったら絶対、あの女に吐いてやろう…」
「「う、うぅ……」」
２人は共通して空いている手で口を塞ぐのであった。

ゴール地点。
待ち構えているヒロナはその様子を見て、頭を抱え、呆れる。
「あっちゃぁ～酔ったな、こりゃ」
「ヒロナさぁ～ん！」
声に反応するヒロナ。
サキ、コウヘイ、ジンが駆け付ける。
「皆！」
「ま、ゴールは間近で見るに限るしな！」
「倍場君……」
ジンは黙々とテレビモニターを凝視。

「……互角のようだな…」
頬がヒクヒク動く。苦笑を堪えるヒロナ。
「ま、色んな意味で…ね……」
「…確かに……」
ンプッ。コウヘイは皮肉めいた苦笑いで返す。

同様にヨシノブ、リン、ムツミが駆け、ゴール前に集結する。
ふと、周囲を見回すリン。
「あれ？　桐尾君、居ないね……」
「多分トイレだろう」
冷静に推測するヨシノブ。いや、冷静というより呑気なのだろうか。
「そういえば、トイレって何処だっけ？」
「……さぁ？」

上下に揺れ、走って行くレクとアキエ。
顔色はみるみる青くなっていく……。まるでデスラーに進化していくかの如く。
「も、もう……限界…」
「やっちゃう？　予定通り、やっちゃう？」
双方、チラリと相手を凝視する。
そして、徐々に接近していく……。スライドしていく。
近付いていく事で互いの狙いに気付く。
「！！　まさか！」
「こいつも！？　こいつも狙ってるの！？」
「だ、だとすれば……」
「「先に……やったモン勝ちね！！」」
ギラリ！
レクとアキエは計算染みた顔を浮かべる。もはや人を超え、悪魔の顔であった。
口を封じた手を払い除け……。

思いっきり頬張るレク！
同じくアキエ！
「「くたばれ！！」」

その壮絶な場面はモニターにもしっかり映された。
これは普通のテレビ番組では放送コードに引っ掛かる領域である。
それを目撃してしまうサキ、コウヘイ、ジン、ヒロナ。
同じく、ヨシノブ、リン、ムツミ。

反対方向から襲来するゲロが激しくぶつかる！
2人は第1に自分に当たる事は避けたかったので、吐くと同時に端へスライドするアクションを起こしていた。
その為、どちらにもゲロは付着せず、相殺に終わる。
「チッ！」
「相殺かつ！」

モニター越しに叫び、突っ込むヒロナ。
「あんたら、何やっとんじゃー！！」

互いの方向へ噴出するブースター。即、現地離脱！
直後、慌しく急上昇するレクとアキエ。
「まさか、同じ事を考えてたとはね…」
不敵に笑むレク。
「しかも、相殺に終わるなんて。あんた、ゲロ浴びれば良かったのに！」
「フン！　浴びるかっつーの！」
2人はかなり高い位置におり、そのまま疾走！！
実質、アップダウンを沿って走る事を放棄する。

何だこれはと、絶句するサキ。

「え？……いいんですかアレ？　アップダウンに沿ってないですよ？」
「問題はない。コースレーンの外へ出なければな！」
ジンが呟く。
「成程……んー、でも、じゃあ何で最初から真上を真っ直ぐ走らなかったんですか？　そっちの方が酔わずに済むのに…」
「それはエネルギー切れになるからよ」
「ヒロナさん……」
「エアボーはバッテリー式。そのバッテリーが切れると走れなくなるから失格になるの。で、より高い位置での走行を維持しようとなるとかなりのエネルギーを使うの」
「はぁ……成程」
「だから、最初からスロープなんて関係の無いような高い位置での走行なんてしたら、途中でエネルギー切れになるの！」
「そっかぁ、ペース配分を考えなきゃいけないって事なんだ…」
「ま、そういうこった！」
意気の良い音で首を鳴らしながらコウヘイが一言〆る。

雲を切り裂き、時に雲を突き抜け、クイーンサイクロンとガブリエルアローの抜きつ抜かれつのデッドヒート！
両者一歩も譲らない膠着状態！　生詰まる展開だ。
はっ！　双方は気付く。
このままでは埒が明かないと。
そうだ。決して無限に走る訳でもない。
何処かでゴールをする。いや、しなければならない。というか、流石に走れない。
だからこそ、ここで王手を賭けなくては！
ゴクリ。レクは息を呑む。
タラリ。アキエは汗を落とす。
２人は端へ寄り、勢いを稼ぎ、アタックを仕掛ける！

激しくぶつかるクイーンサイクロンとガブリエルアロー！
鈍い機械音を立て、何度も、何度も。
壮絶なクラッシュバトルが戦火を上げる！
それだけではなく、走者同士もタックルし合う。
激しいクラッシュの横行！
クイーンサイクロンとガブリエルアローのサーフボディが激しく！
　容赦なくぶつかる！！
塗装も剥げ、下地が露出していく。
更に更に！
女エアボーダー同士による罵倒の嵐が巻き起こる！
「何そのブロンドヘアー！？　あんた、フランス人形にでもなったつもり！？　全然似合ってないし！　モヒカンにでも変えたらぁ？
　ウチがバリカンで刈ってあげよっか！」
「あんたこそ何、その爆発ポニーテールは！　爆弾でも浴びた？
今直ぐエアスケボー辞めてスタントマンにでもなった方が良いんじゃなーい！？　沢山爆発浴びれるよぉ！」
2人は額をぶつけ、猛獣の如く唸る！
「ちょ！　もう、あんたいい加減くたばってよ！」
ムッカー！！　レクは憤慨する。
「あんた馬鹿！？　くたばると言われて誰がくたばるかっての！」
よし今だ！
悪態を着いた瞬間を狙い、蹴りを放つレク。
「スキありぃ～！！！」
「！！　こんのぉ！」
アキエは一旦ジャンプし、蹴りを通過させ、着地する。
蹴りは空気を切るだけに終わった。
「チッ！」
レク、空に響くほどの大きな舌打ちをする。
「隙アリィ～！！」
アキエ、手刀を見舞う！　空気を振動させる程の勢いでだ。

「喰らうかっての！」
眼には目を、歯に歯を！　レクも手刀でアキエの手刀を弾く！
攻撃失敗。不服極まりない。唇を噛み締めるアキエ。
「クッ！」
悔しがるアキエの顔が面白くてならないレクはニヒルに口を歪ますのであった。
「フ……」

2人の獰猛な交戦に唖然となるヨシノブ。
「おいおい、これで良いのか……？」
のっぺりとした表情で呆然とレースを見物するリン、ムツミ。
「これってレースなのかな…？」
ムツミが問い、リンが飄々と返答する。
「レ、レースと言えばどんなものもレースになるんじゃない？」
「う～ん……」

両平手を左右にかざし、呆れるコウヘイ。
「ハハハッ！　よくもまぁ、罵倒しあいながらレース出来るなぁ！」
「ある意味凄いな……」
ジンは淡白に呟く。ココに来ても冷静な奴である。
「あわわ…レクさん……」
必死で両手組み、祈るサキ。
勝って！
絶対に勝ってと。
先程まで額を抱えていたヒロナ、緊張感のある顔になる。
「レク……そろそろケリ付けないとヤバイよ…。あんた、引き分けも嫌いでしょ……」
空気抵抗を浴びつつも、激闘を繰り広げるレク、アキエ。
そうしている間に最大難関である大スロープが目前に迫る！

高い。
高過ぎる！！
現在の位置では上昇しない限り、突破など不可能！
しかも、記憶によるとこの大スロープの後にはゴールがある。
ゴールラインはきっちり左右は当然として上下もライン取りされている。
つまり、ゴールするには降下しなくてはならないという事だ。
そう、もうグダグダ陳腐な戦いをしている場合ではないのだ！
今度こそ勝負を決めなくては！！
２機のエアボー、２人のエアボーダーは離れていく。
空気が一瞬に冷め、静かになる……。
沈黙のまま、２人は絶壁に近いスロープへ勇猛果敢に突き進む。

息を呑むコウヘイ、ジン。

レクとアキエの手がリモコンを手早く操作！
クイーンサイクロンとガブリエルアローはスロープを駆け上る！

「……」真摯な眼のヨシノブ、ムツミに、リン。

レクは勢いを付けて大きく、余計に飛び越える！
アキエはレク程の勢いはないものの、ピッタリ地面に這うように飛び越える！！
「「勝負！！」」
２人は……一気に急降下する！！

組んだ両手を必死で振り、祈るサキ。
眉間に皺を作るヒロナは只静観する……。

ゴワァアアッ！！　激しい風圧！！

急降下勝負に挑むレク！　アキエ！
逆立つ髪の毛！
風圧を堪えるレク、アキエ……。
現在、アキエがリードしている。
だが、レクが鬼神の追い上げをしていく！

「風神は大きく飛び、落下速度を稼いだ……一方、相手は大きく飛ばなかった分、短距離を奔る……」
ジンが厳然と眼を細める。
「……どっちだ……？」

急降下対決のうち、遂にレクとアキエ、クイーンサイクロンとガブリエルアローが並ぶ！！
勝利への鬼神と化した表情のレク！
敗北を許さない修羅の顔と化すアキエ！
レクがアキエを抜く！
しかし、その数瞬後、アキエがレクを抜く！
レクが再度、前へ！
アキエも前へ返り咲く！
目まぐるしく代わっていくトップ。
一秒以上相手にトップを渡さぬ熾烈な攻防である。
そしてスロープの終わりに差し掛かった！
ブレーキを掛けるアキエ。
流石にここで地面にクラッシュしては、全てが水の泡だ！
当然、ブレーキを掛ける。
『普通』なら！
だが、あの女は違った！
ブレーキなど掛けなかった！
だが、当然地面に激突！
思わず、眼を閉じニタリ笑むアキエ。

フッ、勝った。
そう悟る。間違いは無いと。
「まだ終わってないっつーの！！」
「！！？」
まさか！？　まさかっ！？　横へ視線をゆらりとスライドするアキエ！
何と！
何と何と！
飛び撥ねた勢いでゴールへ向うレクがあった！
レクは愛機、クイーンサイクロンにがっしり雁字搦めをし、しがみついた体勢で突き進む！

驚愕するリン、ムツミ。
「ウ、嘘でしょ！？」
ヒロナは不敵に唇を曲げる。
「一か八かの必殺走法、ヴィクトリーロケット！！……あんたらしいわ！」

レクはボードに引っ張られ、アキエを追い越す！
「クッ……」
だがしかし、悔やむ間にゴールラインを先に潜られる。
直後に絶句するアキエであった……。

ゴールシグナル音がコースに響き渡る！
自動式のチェッカーフラッグが高々に仰がれる！
……終わった。
遂に終わった。
長いような短いような、４対４リレーレースが遂に幕を閉じる。
ボードを手放し、スパイ宛らカッコ良く着地するレク。

レクの戦友であり、愛機であるクイーンサイクロンはジンが淡々とキャッチし、電源を落とす。
ゴーグルを上へ戻し、ブルブル震えるレク。
特に両拳を握り、振るわせる。
そして、爆発するように両手を突き上げ、ガッツポーズを取る！
「うぉっしゅあああああああっ！！！」
腹から勝利の雄叫びを大噴出するレクは大ジャンプする！
その姿がサキの位置的に太陽を覆うようなジャンプであった。
太陽をバックに、まるでレクが輝光しているようだった。

隅で地団太踏んでいるアキエ。
不機嫌極まりない彼女を他所に敬意の拍手を送るヨシノブ、リン、ムツミ達ウェブエンジェルス。
ヨシノブ、リン、ムツミの順で爽やかさがグラデーションの様に薄くなっていく。
滑稽な。いや、ある意味芸術かこれは？

レクはそのままチームメイトの元へ飛び込む！
そして掴みようにレクはヒロナに飛びつく。
ヒロナもレクを抱く。
「やったね、レク！」
「う～ん！　もう、気分最高！　勝つって最高！　バンガードストリーム最高ッ！！！」
感涙しながら拍手を送るサキ。
「良かったぁ～。良かったよぉ～」
もはや今の彼女にチーム・バンガードストリームを辞める意志は無かった。
ただただ、感動するサキであった。
「ま、俺らがリードしたお陰っしょ！　この勝利は！」
ニヒルに指を泳がせ、言い当てるコウヘイ。

抱き合いを終了するレク。すたっと着地。
「いや、全員のお陰よ！　ベタだけど、それが事実よ！！」
ヒロナ、穏やかな表情で頷く。
「そうね……」
「まずは倍場君！　序盤に大きなリードを作ってくれてありがとう！」
「フ、当然だ！　俺が独走出来ない訳が無い！」
柔和に笑むレク。
「……そうね。次に獅子瓦君！」
「！」
「強敵相手にリードと、ご苦労様。獅子瓦君が世良ヨシノブの相手じゃなかったら、この試合、負けてた……」
「……礼には及ばん……」
武骨な面でジンは眼を閉じる。
「それに、もっとリードは出来た筈だ……寧ろ誉めないで貰おう。現状満足などアスリートの敵だ…」
「フ、相変わらずね」
レクは感涙中のサキの両肩にそっと手を置く。
「サキちゃん…初心者なのに、良く頑張ってくれたよ」
「レ、レクさん……」
「正直ね、あんたには追い抜かれても良いから只、バトンを繋いで貰えればいいとしか思ってなかった…けど」
「けど？」
「追い抜かれてたら、負けてた。あんたは予想以上の活躍だったって事よ！」
表情が晴天になるサキ。
「あ、ありがとう御座います！　嬉しいです！」
「…んで、最後に……」
ヒロナは自身の顔を指差し、自己アピールする。
「ウチを誉めてくんなーい！？」

一同、ずっこける！
ヒロナが平手で突っ込む！　今度は叩くのではなく、チョップだ！
その一斬がレクの旋毛にダイレクトヒット！
「んぎゃぁ～！！」
流石のレクも悲痛を詠うのであった。
「ってお前かい！　つか、あたしは誉めんのんかい！！」
その漫才芝居に各々らしい形で笑い出すサキ、コウヘイ、ジン。
同様にヨシノブ、アキエ、リン、ムツミも釣られて笑い出す……。

市営サーキット広場。
若者の陽気な笑い声が夕焼けと共に響くのであった……。

5

夕方のファミレス。
ジュースで乾杯し、盛大に飲み上げるレク、サキ、コウヘイ、ジン、ヒロナ。
初試合、初勝利パーティーの幕開けだ！
やった！
やったぞ！
練習試合とはいえ、初めてまともにした試合。
それを完遂する事が出来た事。
そしてそれに勝利した事。
歓喜以外の何物でもない！
身体一杯に喜びを表現するチーム・バンガードストリームの５人であった！

ＣＨＡＣＫＥＲ　ＦＬＡＧ

エピローグ

BLEAK　OUT・TEST　RUNNING

1

山中のに唸るモーター音、バーニア音……。
嵐山高校周辺を巡回するエアスケボー&エアサーファーが計4つあった。
赤&紫のクイーンサイクロン。
黄&桃のシャイニングフェアリー。
青&橙のブルースバイパー。
黒&浅青のシャドウスナイパー。
4機は1直線に並び、チームランニングの真っ最中だ！
ジン&シャドウスナイパーを先頭に、レク&クイーンサイクロン、コウヘイ&ブルースバイパー、サキ&シャイニングフェアリーの順に走行！
大柄なジンが先頭を取る事で、後ろ三人への空気抵抗や体力消耗を防ぐ、所謂『スリップストリーム走法』である。
ジン、コウヘイ、レクに不穏な顔色は窺えないだが、サキだけはどうも、疲弊の隠せない表情だ……。
サキは朦朧と目の前のコウヘイのゼッケンを見つめる。
ゼッケン3が段々、段々とブレて見える。
「そういや、何で倍場さんが3番？……っていうか、倍場さん獅子瓦さんより後に入ったあたしが2番なのは何で……？」
チラと最後尾のサキを見やるレク。
「！　サキちゃん、大丈夫？　付いて来れる？」
「あ……正直、キツイです……」
軽く溜め息を吐くレクはフォーメーションから離れ、最後尾のサ

キの隣へバックする。
レクは怪訝な顔でサキを見やる。うわ……。
「顔色悪いじゃん……こりゃあ、戻った方が良いね」
辛そうだが、何処か嬉しそうな顔のサキ。
「あ…分かりました……」
「んじゃ、ウチとサキちゃんは帰るから、後は好きに練習しといてね！」
グルリとレクとサキはUターンする。
レクの指示を受諾した男2人は反対方向に駆ける。
「…了解した！」
「ま、お大事にっつー事で」
レクとサキ、コウヘイとジン、この2組が遠ざかっていく……。
2人悠々と走行するジンとコウヘイ。
「で、どうするよ？」
「…お前はどうしたい？　個人練習か、俺とのフォーメーション練習どちらか選ぶ事となるが……」
顎を摩るコウヘイ。
「そうだな…やっぱ俺テクニカルコースをもっと磨きたい……が、そればっか練習しても勝てないからなぁ。チームランニングだってその為にやってる訳だし。つー事でお前とチームランニングするわぁ！」
「……良いだろう。続行だ！」
「OK！」
青いマシンと黒いマシンとその乗り手は再び縦一列に並び、加速！
いざ行かん！　山頂へ目掛けて疾走する！！
嵐山高校、エアボー部・部室。
ベンチに横たわるサキ。
ぐったりしているサキを見やるレクとヒロナ。
「ちょっとやらせ過ぎたんじゃないの？」

「…かもね。ウチら3人は慣れてる分、彼女の感覚が分からなくなっちゃってたみたい」
「次から気をつけないとね」
「はいはい」
「あたし、氷取ってこようか」
「そうね。頼むわ」
退室するヒロナ。
首を鳴らしながら歩むヒロナ。
「しっかし今、保健室のベッドは怪我人で満員とはねぇ〜。タイミング悪いわ……まぁでも、氷位は貰わないとね……」

エアボー部・部室。
クイーンサイクロンをフックに掛けるレク。
続いてシャイニングフェアリーを片付けようと手を伸ばす。
その時、呆然と天井の電球を眺めていたサキが口を開く。
「あのー、レクさん……」
「？　何？」
「さっき、気になったんですけど、何であたしのゼッケンナンバーは2なんです？　あたしが一番後に入ったのだから、普通4番じゃありません？」
「あぁ、その事……。そうね。折角だから話そっか！」
顔を上げ、恍惚な表情になるレク……。

2

……それは1年前の事だった。
何も無い空きの部室にずかずかと入っていくレク。
「ここがエアボー部になるんだぁ〜。う〜ん、感慨耽っちゃうねぇ〜！」
晴れ晴れとした表情のレク。

その後から多数の足音が。
ヒロナ、コウヘイ、ジン、そしてもう1人、眼の細い狐のような顔をした男が入室する。
レク、コウヘイ、ジンの3人は各々の愛機を持って入る。
「でも、何も無いからこれから準備していかないとね！」
ヒロナがレクの肩にポンと手を置く。
「そんなの、直ぐよ！　教師共を脅して…」
「またやるんかい！　ただでさえ、教師脅して無理矢理エアスケボー部作った癖に！」
意気揚々と平手を仰ぐレク。
「いいの、いいの！　だってウチら、金払って学校来てるんだし。払った金の分のサービスは受けていいんだって！」
顔を引き攣らせるヒロナ。
「ま、まぁ一理あるけどさぁ…あたしもこの部活が出来て嬉しいし……」
「じゃあ、良いじゃん」
「う、う～ん……」
しかし、脅迫とは倫理的に如何な物か？
難しい顔をし、そう葛藤するヒロナ。
しかし、それも1年経過すれば然して気に留めなくなる事は現在の彼女は知る由も無かった。
そのプチ議論を嘲笑うチャライ男の声。
「ハハハッ！　そんな事どうだっていいさ！　それよりも1日でも早くエアスケボーやりたいんだよなぁ俺」
腕を組み、沈静しているジン。
「同意だ……エアボー高校選手権に出て、優勝する……その為に俺はエアボー部に入ったのだからな…」
きょろきょろとコウヘイとジンを見て感心する狐のような目の男。
「へぇ～2人とも凄いやる気だなぁ」
「おいおい、お前もやる気があってここへ来たんじゃないのか？」

コウヘイがニヒルに尋問する。
細目の男は恐縮張り、背を丸め、後頭部を掻く。
「いやぁ、俺、全くのドシロートで、面白そうだから入部したんだよなぁ～」
全く滑稽だなぁ。失笑するコウヘイ。
「おいおい、細貝君はド素人かぁ。人数は揃っていてもチームとしては思いやられるぜ」
小馬鹿にした言いぶりのコウヘイ。
対し、全然気に留めない眠っているかのような細目を持つ男、細貝涼太【ホソガイリョウタ】。
「あれ？　って事はお2人さんはエアボー経験者？　もう、エアボーも持ってるし」
「まぁな。俺は発祥の地、アメリカで鍛えていたんだぜ？」
思わず感心するレク、ヒロナ。
「へぇ～」
「何？　両親の都合？」
「いや、家出。親から金パクって、学籍弄ってアメリカに言った」
んな馬鹿な。コウヘイが耳を穿りながらしれっと放った爆弾発言に打ち上げ花火の如く吹っ飛ぶレク達。
「けど、飯が不味いから半年で帰ったけどな！　まぁ、昔の俺は青かったって事だ……マシンは最初から青だけどな」
おいおいマジかよコイツ。呆気になるヒロナ。
「や、やるわね。色んな意味で……しかし、何でわざわざアメリカに……」
「俺な、エアボー始めたの、中学生からだったんだ。で、案の定、小学校の時からやってる奴等にはボロ負けでよ……けど、負けっぱなしで終わるのだけは性に合わないんで、アメリカへ武者修行しに行ったって訳だ。経験差をエアボー発祥の地で鍛える事で補うっつー単純な戦略だぁ」
「なるほどね」と感心と少しの尊敬の念を抱くレク達であった。

それ故、真摯に聞き入っていたのだった。
リョウタはハッとなり、ジンを見やる。
「あんたもベテラン？」
小さく、必要最小限に頷くジン。
「…あぁ……小学校５年の時からやってる……」
感嘆詞で応答するリョウタ。
いやはや凄いなぁ。
いやいや、頼りになるなぁ自分のチームメイトは。と。
「…ところで、細貝リョウタ君…だっけ？　あんたの入部理由は何？」
レクは訊ねる。
「まぁその、単に面白そうだったモンで…。足引っ張らないように気をつけるよ……」
サラサラの髪の毛を撫でるコウヘイ。
「しかし、今更エアボー経験者を募るもの面倒……ま、このままのチームでもいいや。足引っ張る奴の分まで俺が活躍すればいいんだからな！」
「誰と組もうがベストを尽くして勝利するまでだ」
窓側を眺め、ジンは己の哲学を論ずる。
「はぁ…」
眠そうにうっすらと感心するリョウタであった。
活気の良い手を鳴らす音が響く。
「まぁまぁ、駄弁るのは後、後！　まずはウチらの居城、部室を形にするよっ！」
ヒロナは首を縦に振る。
「だね！」
首を鳴らすコウヘイ。
「ま、そりゃそうだ……」
５人は掃除に奮闘する。
埃を除去。

次に、雑巾がけ。
単純作業だが、結構な労力を有した。
その時間暇な中年男性教員を1，2人位手伝わせたりもした。
教師を手伝わせた経緯は……言うまでもないだろう。

そして3～4日後。
見違えるような奇麗な部室へと変貌する。
何もセットされてなかったネームプレートにエアスケボー部の表札がセットされている。
部室内。
ガサゴソと喧しい音が聞こえる。
リョウタが嬉々とダンボール箱を開ける。
プチプチクッションを周りに払い飛ばす。
そして、その作業が終了する。
「おぉ！」
眩い光沢。
真っ白な潔癖ボディ。
独特の機械・金属臭。
紛れもないエアボーである。
「遂に俺のエアボーかぁ～　何か感慨深いなぁ～」
隣にヒロナが来る。
「色が気に入らないなら、塗装も出来るよ」
ヒロナの存在に気付くリョウタ。
「あ！　旋皮さん！」
「……で、塗装とかはどうすんの？」
「そうだなぁ～。別に色で速くなる訳じゃないから、このままでいいや」
「あ、そう？　じゃあ、名前はどうする？」
「名前？」
「うん。名前だけは全員固有のものを付けないとダメなの。公式大

会では沢山の選手やマシンがエントリーされるから、それぞれ、間違われないよう固有のカラーリングやネーミングをするの」
成程。と、頷くリョウタ。
「レクは自分の赤いマシンを『クイーンサイクロン』って名前を付けてるよ。倍場君も獅子瓦君も名前付けてるみたいだよ？」
「へぇ～。じゃあ、俺も名前を付けないとなぁ」
真白プレーンカラーの自分のマシンを眺めるリョウタ……。
目が開いているのか否か不明な眼で、眉毛を釣り上げ、凝視する。
「……プレーンヨーグルト？」
ボカンと口を開けるヒロナ。
へ？　何言ってんのこの人。
プレーンヨーグルトが食べたいの？
まさかまさかと思うけど、それ、マシンの名前にする気じゃないよね？
どうかと思うよそれは。
けど、他人の完成を無碍に否定するのは如何なものか。
ヒロナは心中で葛藤する。
……で！
その結果。
「ま、まぁ細貝君がいいのなら…でも、本当にそれでいいかもう一度考えた方がいいよ。だって、その名前は大会を勝ち進んでいくうちに多くの人達に知られていくから。後で恥ずかしい、こんな名前にするんじゃなかったと後悔しないように……ね！」
「はぁ。言われてみれば……」
のんびりと顎を掴み、思案をするリョウタ。
「あ！　でも、このままでいいや。バカっぽい名前だと相手がナメてくれそうだ。それで相手を油断させて勝てるかもしれないぞぉ！
いやぁ、我ながら名案だなぁ～」
そう来たか！　というか、自覚あったのか。
衝撃を受けるヒロナは彼の意見を尊重。いや、実質放任する。

「あ……い、いい作戦ね。グ、グジョッブ…？」
頬をヒクヒクさせるヒロナであった。
ドアが自動的に開く！
否、レクが蹴り飛ばしたのだ！
「ちーっす！　部長のお出ましよん！」
レクが大きな段ボール箱を持って出現！
咄嗟に避けるヒロナだが、酸っぱい表情で怒号を飛ばす！
「ちょっと！　危ないじゃん！　あたしらがドアの当たる場所に居たらどうなってた事か！」
レクは明朗なウインクを放つ！
「大丈夫！　ヒロナなら避けるって信じてたから！」
あのなぁお前は……と、白けるヒロナ。
「それ、もっとカッコ良い場面で使ってくんない？」
「ま、そんな事より…」
「って話聞け！」
ドスン！
段ボール箱を下ろすレク。
重さを示すかの如く、鈍い着地音が発する。
興味・好奇心に誘われ、段ボール箱を凝視するヒロナ、リョウタ。
「？……これは？」
「勿論、高校エアボー選手権に必要な『ア・レ』よ！　ま、見てみ！」
「アレ？」
レクは箱を豪快に開く！
「ジャーン、ジャジャーン！！」
ヒロナ、リョウタは感嘆詞を思わず吐く。
そう、それは部員としての証。
そう、それはエアボーダーの証。
そう、それは学校代表選手の証。
チームユニフォームである！

ユニフォームを手に取り、見せびらかすレク。
「どう？　このデザイン！　カッコイイっしょ！？」
レク、腰に手を掛け、へそが見える位胸を張る。
黒のメインカラー、青のサブカラーに赤い炎の模様と、派手で攻撃的なユニフォームだ！
「うわ、ハッデェ～！　ま、あんたらしいわぁ…」
「ナッハッハハ！　因みに、ヒロナの、メカニック用のユニフォームもあるよ！」
「マジ！？」
ヒロナは箱の中を漁り、１つ異質な服を発見。
引っこ抜くように手に取る。
工場の作業員が着ている所謂作業服だが、レク達のユニフォームを反転させたようなカラーリング……つまり、青のメインカラーに赤のサブカラー、そして黒の炎といったデザインだ。
淡々と自分のユニフォームを眺めるヒロナ、さり気無く笑む。
「こういう事もあるから、嫌いになれないんだよねぇ……」
「ん？　何か言った？」
「いや、別に……」

そこへエアボーの来る音が聞こえる。
「おいおい、随分騒がしいな」
コウヘイとジンが帰還し、部屋へ来た。
ジンはレクがおっ広げているユニフォームを視界に入れる。
「！　ユニフォームか…」
「そう！　カッコイイっしょ！」
「……まぁ、悪くは無いな」
愛機、ブルースバイパーを充電器に挿すコウヘイ。
「ま、右に同じってトコなか？」
満面な笑顔で何度も何度も頷くレク。
「うんうん！　兼々好評みたいだねぇ～」

「あ！　ユニフォームに番号がある！」
残りのユニフォームを漁っていたリョウタが呟く。
「当然でしょ！　ユニフォームだもん！」
堂々とレクは言い放つ。
「合計1～4まであるみたいだけど、誰がどの番号になるんだ？」
ふと、素朴な疑問を浮かべるリョウタであった。
レクは親指で己の美顔をこれでもかと言わんばかりに示す！
「ゼッケン1番はウチよ！！　だって、部長だから！　ナーハッハッハハー！！！」
レクは喉ちんこが見える位大笑いする。
コウヘイはジンに訊ねる。
「おいおい、何時の間にあいつが部長になってたんだぁ？」
「……誰が部長でも、俺にはどうでもいい事だ」
「ハハッ、そう来たか。ま、俺は仕切るようなタイプじゃないし、やりたい奴にやらせておけばいいか。適当にいう事聞いときゃ良さそうだし」
「妥当だな。無意味なイザコザを起こす事ほどの愚行は無い……」
軽快な口笛を吹くコウヘイ。
「……で？　部長さん、残りは？」
寝ているのか起きているのか分からない目をした男、リョウタが問う。
「2番は細貝君！　あんたよ！」
「あ、俺が2番なんだ」
嬉しくも不服でもない。
そんなどうとも読めない顔に口ぶりの細貝リョウタであった。
「ゼッケン3番は倍場君！　そして4番は獅子瓦君よ！」
「ほう、俺が3番か…で、どういう意図なんだこれは？　理由ぐらいあるだろ？」
「！？　意図？　あぁ、それはね……」
早く言えよと言わんばかりに指で組んでいる腕を叩くコウヘイ。

「只の背の順ッ！！」
何じゃそりゃ！　無反応のジンを除き、脱力に爆散する3人であった！
頭をポリポリ掻くリョウタ。
「う～ん、何か拍子抜けだなぁ」
対し、至って真面目に反論するレク。
「背の順は大事よ！　だって、番号早いのが背が高いと後ろの人が全然見えなくなるじゃない！　この中ではウチが一番背が低いんだから、1番にならないとあんたらに隠れて見えなくなるじゃない！
冗談じゃないわ！　この風神レク様が目立たないなんてあり得ないし！！」
殺風景な沈黙……誰も合意をしない。
だから何だと言わんばかりにそっけないレク以外の4人であった。
「でまぁ、序でに？　並んだ時に隠れる奴がいたら可愛そうかなぁっと思ってその順番にしたの！」
「ふ～ん……」
実にどうでも良さそうにリョウタは欠伸をする。
コウヘイ、ジンも同様に。
彼らにとって並びで目立つ・目立たない事など、興味が無かった。
その沈黙に、自分のテンションに誰も付いてきていない事に気付かないレク。
自分の作業服を眺め感傷に浸っているが、ある事に気付く。
ＴＥＡＭ　ＶＡＮＧＵＡＲＤ　ＳＴＲＩＥＡＭと刺繍されたロゴが背中や右胸ポケットなどにあるではないか！
「あれ？　何かロゴが入ってる。何？　チームバンガード？　ストリーム……！？」
「お！　気付いたようね！　チーム名よ！」
「……？　どういう意味これ？」
「バンガードは最先端で、ストリームは流れ！　常にチームとして最先端を行き、流れ進むって意味でネーミングしたの！」

おお。食指が動いたのか、好印象な反応をするコウヘイは指を鳴らす。
「バンガードストリームか……フ、まままあ悪くないネーミングだ！」
サムズアップするレク。
「アリガトッ！」
ジンは相変わらず、黙々と眼を閉じている。
「チーム名が何であろうと俺にはどうでもいい話だ……勝つ！　それだけだ……」
フ、こいつらしいな。
もはやコメントするまでもない。
そんな空気のレク達だ。
「まぁ、とにかく、明日から練習よっ！！　絶対優勝するからねっ！！」
「あぁ！」
これぱかりは戦士の顔で返事するリョウタ。
誇れるようなカッコイイ理由で参加した訳ではない。
しかし、エアボーをしてみたい心に嘘は無い。
リョウタにしては珍しいハキハキとした返答であった。
不敵な笑みを浮かべるコウヘイ。
「フ、優勝か。アメリカで鍛えた実力！　魅せてやる！」
コウヘイは毒蛇のように、一瞬で己の口元を舌で嘗めずり回す。
無論、狙いは優勝。敵を毒牙にかけてやる。
そう企むコウヘイであった。
一方でジンは黙々と窓の外を眺める。
彼の脳裏にまだ見ぬライバル達の陰が威圧的に立ちはだかる！
眉間を顰めるジン。
高校エアボー選手権にはプロ候補を噂されている有名な同年代のエアボーダーが多数存在する。
その内の1人には世良ヨシノブの影があった。

影の癖に余裕綽綽とした印象を受けさせる……。
必ずや打倒してやる！　それらの存在が戦意を否応にも昂らせる。
奴等を打倒したい。駆逐したい。撃破したい。
いや、しなくては。
俺はプロエアボーダーを目指している。
その為の壁を撃破すべく、日々精進しなくては！
冷静なジンだが、眼と拳は野望に満ちていた。

深々と激しく降り注ぐ雨。
山の登り道をチームランニングするレク達。
先頭をコウヘイがリードし、ジン、レク、リョウタの順で走行！
激しい雨とは、コースのトラップの１つと言えるものだ。
故にテクニカルコースの最も得意な彼が牽引するのは道理に適っている。
しかし、そんなコウヘイですら現状の厳しい雨に難色を示す。
「おいおい、どんどん激しく降って来ているじゃないか……これは中止した方がいいんじゃないか？…」
ジンが次いで１直線の口を動かす。
「俺は別に構わんが……多数決で決めろ…」
「あたしも別に構わないわ！　細貝君！　あんたはどう？」
飄々とリモコンで微調整しながら、リョウタ……。
「……俺も大丈夫！　進もう！」
「ＯＫ！　皆、続行よ！」
全員合意し、山の頂へ這い上がる！
最後尾のリョウタは走行に奮闘しつつも、考えていた。
「皆、凄いやる気だ……。何か俺だけ場違いな感じだなぁ。けど、エアボーは面白いから辞めたくないし、足引っ張るわけにもいかないよな……」
リョウタは眉毛をＶ字に吊り上げる、
「だったらせめて、足を引っ張らないようにしよう！　こいつらを

優勝に導く手伝いをしよう！！　それが多分、俺の役割なんだ……」
加速する前方、レク達。
それに気付き、リョウタもリモコンで加速させ、ピッタリ付いていく！

雲行きが更に悪化。
遂には落雷までも生じる。
激しい雷鳴！
唸るスパークが眩く轟く。
そのスパークははっきり可視するものであった。
幾多の稲妻。
うち１つが急降下！！
雷撃が不運にもリョウタを貫く！！
「グァァァァァァッ！！！」
「な、何ィ！？」
「そんなバカな！」
目を疑うジンとコウヘイ。
そのまま、硬くて痛いコンクリートへ転がり落ちるリョウタ。
坂の終わった地点にてようやく転がり終わる。
「ほ、細貝君―！！」
レクはリョウタの安否を尋ねるべく、呼び掛ける！！
リョウタの現在の、その姿は無残他無かった。
何ともはや。
リョウタが激しい練習中に負傷してしまうのであった。

……とある病院内。
入院室のベッドのうち１つに、リョウタが臥していた。
悄然とする黒こげ肌にチリチリ髪のリョウタ。
だが、その姿を嘲笑する者は誰もいない……。
いや、誰も笑えなかったのだ。嗤える筈もなかったのだ。

そんな彼を囲うレク、コウヘイ、ジン、ヒロナ。
「まさか、復帰不可能と診断されるとはね……」
そう呟き、意気を落とすヒロナ。
絶望するレク達……。
「何て事なの！？　ケガなんて……たかがケガなんかに！！」
俯くリョウタ。
「ゴメン…しかも、初の練習試合前に……」
リョウタはベッドの布団を破りそうな位握り締める……。
一同、口を閉じ、悄然とする。
重苦しい。
あまりにも重苦しい空気が彼女達に圧し掛かる。
ジンは無言でこの場を後にする。
過ぎた事を言ってもしょうがない。
だから何も言わない。
彼にとっては、それだけの話であった。
「フッ……」
何時のも皮肉までは言わず、淡々と消え去るコウヘイ。
レクは数秒ほど思案し、表情を凛とさせる。
「細貝君、あんたは走れなくてもウチらの味方よ」
そっと告げ、ヒロナの腕を引っ張り、ドアへ向かう。
「ちょ、レク！？」
前髪で目が隠れているレク……。
「……何も言わないで」
心中を汲み取り、ヒロナは眼を細め、頷くのであった。
「…分かった……」
ヒロナは頷き、レクに引っ張られる。
そして、ドアが閉まる音が小さく響く。
恍惚な眼で窓の外を見るリョウタ。
雨は降ってないが、じめっと曇っている天気。
何が拙かったのか？

どうしてこんな事になったのか？
経験量か？
いや、それ以上に覚悟・本気さが足りなかったのだろうか？
だから、落雷という間抜けな目に遭ったのだろう。
何だか重荷を降ろした気分だった。
だが、その重荷を降ろした瞬間、自らがお払い箱になった気がした。
おかしい。
雨が室内に降り注いでいる。天井に穴が開いている訳でもないのに。
しかも、目から雨が。
その雨はゆっくりと落ちていくのであった……。

3

レクの重い息を合図に回想が終了する。
「……という訳なの」
感涙に震えるサキ。
「そ、そんな事がぁ～」
強く頷くレク。
「そう！　深―い過去があったのよぉ。だからね、サキちゃん、あんたにはケガで戦えなくなった細貝君の分まで頑張って欲しいの！」
か細い眉毛を吊り上げ、猫のような小さな拳を握り締めるサキ。
「はいっ！　頑張ります！！」
「って、途中から事実と違ってるから！！」
激しいドアを開ける音と同時にヒロナの突っ込みの矢が飛来する！
ヒロナは氷袋を持って入室！
左右に紙コップのジュースを飲みながらコウヘイ、ジンも来る。
「あ！　ヒロナさんに、皆さん……途中から事実と違うって？」
「そうよ！　細貝リョウタはケガなんかしてないの」

「で、本当はどうなったんです？　その細貝リョウタって人は」
「うん…真相はね……」
ヒロナは苦笑い交じりに回想に耽る……。

4

1年前。
リョウタはボケっと夜中の駅前をぶらついていた。
「あ～あ、疲れたなぁ……結構、エアボー部ってキツイんだなぁ～。モータースポーツだから楽だと思ったのになぁ。残念……」
自らの肩を叩きながら、歩行する。
そんな中、『あるもの』を視界に入れ、急に歩みを止めるリョウタであった。
何と！
こんな所に今までにないものが。これは珍しい。
インターネットやオタク文化でよく聞く『メイド喫茶』という店があるではないか！
思わず感嘆するリョウタ。
「おぉ！　これはメイド喫茶じゃあないか！　いやぁ、初めて見たよ。この街にも開店したんだなぁ～。ビックリ！」
好奇心に敗北し、リョウタは店内を覗いてみる。
「おぉ～！！」
間抜けに口を開け、衝撃を受けるリョウタ。
常時は目を開かない彼が目を開く。それだけの衝撃がそこにあった。
美女メイドがお世辞にもカッコ良くない男達を持て成しているではないか！
感動した！　羨ましい！　俺も行ってみよう！
思うがままに店へ足を進めるのであった。
「お帰りなさいませーご主人さまー！」

メイドがそう言った。
リョウタは感動に震える。高揚する。
今、言ったよ。
今、このメイドさん、『お帰りなさいませご主人さま』って言ったよ！
どうしよう。いや、もうどうしよう。嬉しい。嬉し過ぎるぞ。
リョウタは恍惚ににやける。
「た、ただいま？」
言っちゃったよ。言っちゃって良かったのかな？
「さぁ、どうぞこちらへ…」
メイドがさぞ手馴れた様子でリョウタを席へ案内する。
ほいほいと付いていくリョウタ。
そして１０歩ほど歩み、指定された席へ座る。
「ご注文は何になされます？」
メイドが眩い笑顔で尋ねる。
しかし、瞬時に彼の興味は変わった。
リョウタは写真撮影場の方を好奇心溢れる眼差しで見つめていた。
「おぉ～～っ！！」
何だイキナリこの人は？　驚くメイド。
「ど、どうされましたか？　ご主人さま……？」
「あれ……何？」
と、興味津々な顔で指さす。
その先にあるのは小さいが、写真撮影場であった。
メイドは写真撮影場だと答える。
それは本店に通い続け、スタンプカードのポイントを集めたら、メイドと写真を撮れる事を営業スマイルで説明するメイド。
興味心身に聞き入るリョウタ。
無駄に、いや、ホント無駄に真剣に聞き入るのであった。
メイド喫茶の自動ドアから出て来るリョウタ。

満面な笑顔である。
「いやぁ、楽しかったなぁ～。ジュースしか注文しなかったけど、楽しかったぁ」
だが、眉毛を歪め、渋い顔をするリョウタ。
「でもここ、結構お金取るなぁ～。高校生の小遣いじゃあ厳しいぞ……」
リョウタの頭上に電球が点灯する。
「そうだ！　バイトしよう！　バイトでお金を貯めてメイド喫茶に通ってあの店全てのメイドの写真をコンプリートするぞっ！」
やる気あるのか無いのか、イマイチ不明な拳が天に上がるのであった。

その後のリョウタ。
エアボーを利用し、新聞配達を挑戦。
それに踏まえ、週に3～4日メイド喫茶に通い、スタンプカードを埋めていく。
更にエアボー部の地道な走行訓練を遂行する日々を送る。
2週間に1回ぐらいのペースでメイドと写真を撮る。
1人、また1人と、多数のメイドとの写真を完成させていく。
無論、これだけ労力を費やしている訳だから、授業中は睡眠時間と化す。
そして、教師に怒られ、時間を奪われ、面倒事が出来てしまう。
そんなリョウタは食堂でうどんを啜りながら、呆然と考え込む。
「あぁ、何か最近、エアボーが楽しくなくなったなぁ……」

頭を下げ、退部届をレクに献上するリョウタ。
「じゃ、そういう訳で」
未練も糞もないと体言し、去っていこうと一歩進めるリョウタ。
唐突故、驚きを隠せないレク、ヒロナ。
未反応なコウヘイ、ジン。

「ちょ、ちょっと待ってよ！　そんなイキナリ……」
ヒロナが通せんぼする。
「理由ぐらい言いな！」
大きな足音を立て、レクがドアの前に往生する。
「いやぁ、何というか飽きちゃってさぁ～。ってか、俺って飽きっぽいんだよなぁ。基本、1か月毎に趣味を変える人間なんで……」
リョウタはしれっと、それでいて爽快に暴露した。
その呆気なさに唖然と埴輪のようなシンプルな顔になるレクとヒロナであった。
暫し、沈黙が続く。
チクタク、チクタクと。アナログ時計が音を刻む。
その音が聞こえる位、今は静寂なのである。
約5秒で正気に戻るレク。
「何じゃそりゃあー！！！」
怒髪を研ぎ澄ませ、レクは咆哮するのであった。
「じゃあそういう事で」
リョウタはレクの妨害をお構いなしに、ドアを開け、レクを払い飛す。
そして、外の空気と光を入れ、姿を消すのであった。
間抜けに開いたドアに侘しい木枯らしが横切る。
ヒロナは椅子に座り、頬杖を着く。
「あ～あ、いっちゃったね。ま、元から気分屋なトコあったから、別に驚く事でもないけど……」
手をわなわな震わせ、地団駄を踏み続けるレク。
「ムキー！！　あーもぅムカツク！！　一人抜けたら試合出られないじゃんかー！！」
レクは怒号を発しながら、怒りに悶える。
終いには机を蹴るなど、八つ当たりを開始。
ヒステリーの極地ここにあり。
荒れに荒れるレク。

思い息を吐き捨てるヒロナ。
「やれやれ……レク、止めなって！　八つ当たりしてもしょうがないよ！」
と、レクを抑える。
レクは身動きとれず、暴れるのを止め、悄然とする。
「だって、生徒は脅さない主義だモン……。生徒は教師に金払ってるのに従わされてる可愛そうな存在だもん……ウチ、そこまでタチ悪くないモン……」
唇を尖らせ、腐るレク。
そんなレクはまるで小動物のように思え、ヒロナが柔和な表情でレクの頭を撫でる。
「よしよし……泣かない、泣かない！」
鼻で嗤い、出口へ歩むコウヘイ。
「ま、１人減ったのなら、１人増やせばいいだけっしょ！　じゃ、欠員補充でもして来っかねぇ～」
出口のから差す陽の光に消え入るコウヘイ。
「過去を憂う意味などない…俺は前に向って走るだけだ……。向う先に勝利がある」
俺はお前等とは見ている物が違うと言わんばかりにジンは背を向け、姿を消す。
ヒロナは表情が苦くも緩む。
「ふぅ、ウチの男共はタフなのか、薄情なのか……」
真意はヒロナには分からなかった。
他人だから当然であろう。
ましてや異性。
寧ろ分かったら、セラピスト。いや、超能力者モノである。

5

……真相はリョウタがエアボーに飽きたからであった。

そして、ナンバリングの謎も単に背の順であった事も明らかになった。
あまりにも馬鹿馬鹿しかったのか、萎むように脱力するサキ……。
「なぁ～んだ。そんな事だったんですかぁ～」
「ま、あたしらにシリアスなんて似合わないっしょ」
「ですね……」
御尤もと、サキは苦笑いする。
ヒロナ、ひょいと氷袋を渡す。
もはやすっかり、半分ぐらい溶けている氷袋であった。
「あっちゃー、長い事話してた所為で半分ぐらい溶けちゃったねぇ～」
「あ、いいです。半分でも氷が残ってるなら使います」
手を差し出すサキ。
「そう」
ヒロナはサキに氷＋水袋を渡す。
サキは額に当て、微妙な冷たさに放心状態になる。
「あ～ん、気持ちいい～っ！　あ、でも、細貝リョウタって人は男ですよね？　じゃあゼッケン2番の女用があるんです？」
ヒロナは単的に答える。
「上のジャケットは細貝君のお下がりよ。で、下のスパッツとスカートはレクの予備用。予備のユニフォームは幾らでも買わせてるんだよねぇ。アイツ」
「あぁ、成程……」
一方で思い起こし、憤慨するレク。
「ムキー！　今思い出しただけでも腹立つ！！　飽きたとか何！？　飽きるんなら最初から来んなっつーの！！」
ドスドスと、地団太踏んで荒れ狂うレク。更には鼻息を噴出する。
地団太を踏むのは何処かの誰かを彷彿させる。
まぁ、類はライバルを呼ぶとでも言うのだろうか……？

「荒れるのも程ほどにしときなよ！」
ヒロナが呆れつつもレクに注意を促す。
フン、下らん。黙々と、背を向け去るジン。
「……下らんな。消えた奴の事を思い出すなど無意味だ…」
続いてコウヘイが失笑する。
そして、ポケットに入れていた両手を左右に持ち上げ、仰ぐ。
「ハハハッ、言えてるな！　ま、興味があって参加しても、飽きて辞める奴もいれば、最初は興味ないが、段々興味を持つ奴もいるってこった！　要するに価値観は人それぞれってな……」
サキ、呆気に聞き入る。
「は、はぁ……」
後者に己が該当している事に気付かないサキであった。
そしてサキはふと脳裏から疑問が浮かぶ。
実に素朴な疑問だった。
「そういや、細貝リョウタって人、今何してるんだろ……？」

くしゃみをする狐のような細い目の男。
現在のリョウタである。
「どうしたリョウタ？」
ラジコンをコントロールしている同年代の友人達のうち1人がさばさばと訊ねる。
「あ～、いや、何だろ？……誰かが噂したんじゃないかな多分」
「噂ねぇ～」
そう、淡々と会話しながらリョウタとその。いや、現在の友人達はラジコン操作を続行。
各々のマシンを走らせる。
マシンは並べられたコーンを避けながら進んでいく。
その内の1つ、真っ白なラジコンが2～3番手を疾駆。
「いいぞぉ、プレーンヨーグルト！」
思わず、失笑・馬鹿笑いする友人達。

「いや、プレーンヨーグルトって……」
「未だに笑えるネーミング！」
しかし、その隙に乗じてリョウタのマシン、プレーンヨーグルトが1位に躍り出るのであった。
……リョウタは覚えているのだろうか？
かつて自分がエアボーをしていた事を。
そして、自らが使っていたエアボーの名が今自分のラジコンマシンにつけている名称と同じ事に。
気付こうが気付かまいが、マシンは走る！
リョウタも毎日を生きる！

バン！　エアボー部・部室のドアが開く。
無言で外の空気を吸うジンとコウヘイ。
喧しい女の声が室内から響くのとは裏腹に男前2人が夕陽に照らされる。
コウヘイは紙コップをゴミ箱に捨て、屈伸など軽いウォーミングアップを開始する。
「さぁて、練習といくか！」
ジンはグローブを強く装着する。
ギラリと勝利に燃える眼を隠すように。
「あぁ……今年こそ初出場の初優勝だ！」
コウヘイはブルースバイパーを、ジンはシャドウスナイパーを駆り、天へ飛翔！！
夕焼けに先鋭的なモーター音、バーニア音が奏でられる！

ＧＯＡＬ・ＥＮＤ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0534z/

超走エアスケボー！　ソニックハウリング

2011年12月1日23時46分発行